

大菩薩峠

壬生と島原の巻

中里介山



昨日も、今日も、竜之助は大津の宿屋を動かない。

京都までは僅か三里、ゆつくりとここで疲れを休まして行くつもりか。

今日も、日が暮れた。床の間を枕にして竜之助は横になって、そこに投げ出してあつた小さな本を取り上げて見るとはなしに見てゆくうちに、隣座敷へ客が来たようです。

「どうぞ、これへ」

女中の案内だけが聞えて、客の声は聞えないが、畳ざわりから考えると一人ではないようです。

「お風呂が明^あいておりまする」

「ああ左様か、それではお前、さきにお入り」

「わたしはあとでようござんす」

「御一緒にお入りなされませ」

客は若い男女の声、それが聞いたことのあるようなので、竜之助は本を伏せる。

隣へ来た客というのは、火縄の茶店で竜之助と別れた男女。竜之助は再び耳を傾くるまでもなくそれと悟さとつて、そうして奇妙な心持がしました。

「参宮の帰りにしてはあまり早い」

今宵はあまり客も混雑おおでらせず、大寺にでも泊ったような気持。

静かにしていると、襖ふすまを洩れて聞ゆる男女の小声が、竜之助の耳に入ります。

「明日は京都へ着きますなあ」

「京都へ着いたとて……」

男は歎息の声。

「わたしは、早うお雪さんに会いたい」

これは、お浜に似た女の声。

「妹に会うたからとて、どうなるものではない……ああ、わたしはいつそこで死にたい」

「ほんとに、死んでもうた方が……」

ここで、また話が途切とぎれます。

竜之助思うよう、やつぱり、これは無分別むふんべつな若い者共じや。

「わたしじゃとて、もう亀山へは帰れず」

「わしも京都へは帰れず」

「死んでしまおう、死んでしまおう」

この声は少し甲かんを帯びて高かった。竜之助がこちらにあるこ

とを知らないものだから。

男は死んでしまおうと言う、女がそれに異議を唱え^{とな}ないのはそれを黙認している証拠で、この男女の相談は心中というところへ落ち行くのが、ありありとわかります。

「それでは、お前」

「真さん、わたしは、もう覚悟をきめました」

「済まぬ、済まぬ、お前には済みませぬ」

「いいえ」

「この世の納めの盃」

またここで話が途切れて、暫らくは啜^{すす}り泣きの声。

「さあ、お前、書き遺^{のこ}すことはないか」

「はい、実家^{うち}へ宛て、一筆」

「落着いて、見苦しからぬようにな」

「はい」

やたて

矢立をパチンとあけて、紙をスラスラと展ひろげる、その音まで鮮あざやかに響いて来るのです。竜之助は男女の挙動ようすを手にとるように洩れ聞いて、どういうものか、これを哀れむ気が起らなかった。

過ぐる時、少しばかりの危難に立合つてやったのにさえ、自分に対しては再生の恩のように礼を述べた女が、ここでは、この男のために喜んで死のうという。それほどに粗末な命であつたのか。死を許す深い仲を、傍そばで見みて嫉そねむのではない、死の運命に落ち行く男女の粗末な命を嘲あざわめるのであろう。助けらるべき人を見殺しにする、そこに一種の痛快な感じを以て、竜之助は人を殺したあとで見する冷笑を浮べて寝ころんでいるのです。

「死ね、死ね、死にたい奴は勝手に死ぬがいい」

心の中では、こんなに叫んでいる。それでもなんだか、後からついて来るものがあるようです。

二

その晩は無事に寝て、翌朝、隣の室が騒々そうぞうしいので、竜之助は朝寝の夢を破られました。ああ、昨夜の男女の客は——惜しい宝を石に落して砕いたような気持がしないでもない。途切れ途切れの話と、すすり泣きの声を耳にしながら、ウトウトと寝入ってしまったて、その後のことは知らない。隣の室では人が入ったり出たり、廊下を駈けたり、階段を蹴けつたり、私語ささやいたり叱しかつたりする。思い合わすれば、たしかに変事があつたに相違ない。竜之助は別にそれを確かたしめてもみず、やがて朝飯の膳に向い

ます。

「昨晚から、さだめてお喧やかましゅうござんしたろう」

「何だ」

「まあ、お隣の騒ぎを御存じなされませぬか」

「知らぬ」

給仕に出たのは、丸い顔の気の好きそうな女中。あの騒ぎを、隣室にいて竜之助がほんとに知らないらしいのを不思議がり、
「宵の口に、若い御夫婦づれが、これへおいでになりました」

「それは知っている」

「その御夫婦づれが、心中をなさいました」

「心中を……」

「はい、吾妻川あずまの湖みづうみへ出ますところで、二人とも、しつかり抱き合い身を投げたのを、今朝の暗いうちに、倉屋敷の船頭衆が

見つけまして大騒ぎになりました」

「うむ——」

「宅の方は、昨晚、三井寺あたりまで参ると申し、五ツ過ぎに、連れ合いしてお出かけになりましたが……それっきり。心配しておりますと、吾妻岸に身投げがあつたとの噂で、男衆が駆けつけて見ますれば、案あんの定じょう、宅のお客様でござりました」

「うむ——」

「お医者様を呼んで、お手当をしていただきましたけれども、すっかり息が絶えておしまいなすつたのでございます」

「うむ」

「ともかく、宅でお引取り申すことになり、検死を受けまして、やがてこれへお連れ申すはずでございます」

「不憫ふびんなことをしたな」

「ほんとに、おかawaiiそうでございますよ、まだお若いのに、な
んという無分別むぶんべつでございましょう」

「どこの人じゃ」

「宿帳には、京都三条下さがる……何とか書いておいででござんし
た。おお、あの、遺書かきおきもちゃんとしてありました、昨晚のう
ちしたたに認めておいたものと見えて、お室の床の間に二通並べてあり
ました」

「遺書にはなんと書いてあつた」

「お役人衆がおいでになり、手前共主人も立合いまして、封を
切つて見ますと、お二人は、夫婦ではないのだそうでござり
ます」

「夫婦ではない……」

「はい、親戚同士とか、いとこ同士とか申すので。それにはい

ろいろの縁が絡からんでいるというのでございますよ。女のお方は伊勢の亀山にお実家うちがおりなさるとやら。どうも、ただの色恋ばかりではないらしいゅうございます」

竜之助が食事を終つても、女中は調子に乗つて話し込んでしまします。

「その遺書の中には、男の方のお妹さんが都の島原へお売られなすつたとやら。御承知でもございましょう、島原は色町でござりまする」

「うむ」

「それをたいそう悲しんで、家のつぶれたのは不運あきうと諦めもするが、妹の身が不憫ふびんじゃと、それを細々こまこまと書いてお詫わびに致してありましたそうな」

「うむ」

「お家は相当の大家なそうにござりますけれど、盗賊に入られましたのが不運のもとで……お武家様、このごろ、都の盗賊と申しましたならそれはそれは怖ろしいことで、御用心なされぬといけませぬ」

「盗賊が——」

「左様でござります、なんにしても乱世でござりますから、盗賊も大袈裟で、おおげさ掛矢の大槌を以て戸を表から押破つて乱入致し、軍用金を出せ、軍用金を出せと嚇おどしますとやら」

「うむ」

「そのほか辻斬つじざりは流行はやる、女の子は手込てこめにされる、京都へ近いこのあたりでも、ほんとに気が気ではありませぬ」

「うむ」

「あれまあ、人が見えます、駕籠が二挺、あれが昨夜の若夫婦

でありましょう。お武家様、ごらんあそばせ、まあ、おかawaii
そうに」

欄干てすりの間から外の方を覗のぞいていた女中の声が慌あわただしい。

三

今の京都は怖ろしいところ。

それは女中どもに聞くまでもなく、竜之助は好んでそこへ行
くのである。いま京都に群がる幾万の武士さむらい、それを大別すれば、
佐幕と勤王。

徳川を擁護ようごするのと、それを倒そうとするのが、天子在すおわ
ところで揉もみ合っている——その間に絡まるからのが攘夷じやうい。志士を
気取って勤王を看板に、悪事を働く厄介者やっかいもの。

暗殺が流行^{はや}る、おたがいにくめぼしい奴を切り倒して勢力を殺^そぐ、京都の町には生首^{なまぐび}がごろごろ転がっている。新たに守護職を承った会津中将の苦心というものは一通りでない。病軀^{びようく}を起して、この内憂外患の時節に、一方には倒れかけた幕府の威信を保ち、一方には諸国の頑強な溢^{あふ}れ者^{もの}を処分してゆく、悪^{にく}まれ役^{やく}は会津が一身に引受けたのであります。

会津侯の手に属して、これら勤王の志士、多くは西国諸藩の武士に当るべく、かの新徴組が江戸を発したのが文久三年二月八日でありました。

徳川は、全く下り坂で、旗本^{はたもと}も腰が抜けてしまった、関東の武士も今は怖^{おそ}るるところはない、ただ新徴組の一手と——それに東北の質樸^{しつぽく}な国侍^{くにざむらい}に齒^こごたえがある。

その新徴組の中で、最も怖^{おそ}れらるる近藤勇、土方歳三らは、

もと徳川の譜代ふだいでもなんでもない。六十余州の兵に当ると昔から謳うたわれた東国純粹の風土の鍛錬を生れながらに受けたのみで、持つて生れた剛胆の氣象と、学び得た剣道の精妙が、成敗をよそに見て、志士の仮面をかぶった無頼漢退治に当ろうというのであります。

おりから関東武士の面目というものは、旗本の間にはなく、譜代大名の中にもなく、辛かううじて彼ら田舎武士いなかざむらいの間に残つて、そして潮うしおの湧くような意気組みの西国武士に当ることになったのです。

机竜之助の如きは、勤王家でもなし、佐幕党でもない、近藤、土方のような壮快な意気組みがあつてでもない……大津を立つて比叡ひえい風が軽く面かおを撫でる時、竜之助は、旅の憂うれさをすつかり忘れて小気味よく、そして腰なる武蔵太郎がおのずから鞘走さやばしる

心地がして、追分へかかろうとする時、ふいに後ろから呼び止める声がある。

「それへおいでの御仁、暫らく」

顧みれば、筋骨逞しい武士が一人、静々と歩んで来る。ほかにもないから、呼び留めたのは自分のことであろう。

「お一人旅とお見受け申す」

黒の着物に小倉の袴で、高足駄たかあしだを穿き、鉄扇を持った壮士。

小刀の短いわりに、刀は四尺もあらんと思われる大きなのを横に差し、頭の頂辺てうぺんから竜之助を見下ろして進んで来たので、

「いかにも一人旅」

竜之助も、それを睨み返すような気持で、例の無愛想な返事です。

「拙者も一人旅、御同行ねがいたい」

「いずれへおいであるな」

「京都まで」

「いかさま」

やなぎはみどりはなはくれない

「柳緑花紅」の札の辻を、逢坂山おうさかやまをあとにして、きわめ

て人通りの乏しい追分の道を、これだけの挨拶で、兩人は口を結んだまま、竜之助の方が一足先で、高屐こうげきの武士はややあとから、進み行くこと数町。

竜之助は、旅に出ても、こちらから人に話しかけたこともないし、同行を求めたこともない。わざわざ後ろから、我を見かけて呼び止めて同行を求めたこの武士にはどうも油断がならなかった。

自ら経験のあるものでなければわからない。竜之助の如き者から見れば直ぐ知れることだが、この武士は、好意で自分の道

連れになつたものでない、手つ取り早く言えば、自分を斬りに来たものである——近寄る時に、その人の心持次第で和氣も受けければ殺氣も受ける。

「いずれからおいででござるな」

壮士は問いかけた。

「関東より」

「関東……関東はいずれの御藩でござるな」

「浪人者でござる」

「して、いずれの藩の御浪人」

「生れついで浪人でござる」

「生れついで浪人——」

壮士は、鼻の先に少しく冷笑を浮べて、

「武芸修行でござるかの」

「左様でござる」

「武芸は剣道か、槍術そうじゆつか……ただしは」

「剣道でござる」

「剣道は何の流儀を究めきわなさるな」

壮士は突込んで竜之助に問いかけるので、竜之助はこれをするさがります。

「貴殿の御流儀から承わりたい」

「いかにも。拙者はまず自源流を学び申した」

「自源流？」

「関東にはお聞き及びもござるまいが、薩州伊王ヶ滝の自源坊より瀬戸口備前守びぜんのかみが精妙を伝えし誉れの太刀筋たちすじ」

「いや、かねてより承知してござる」

剣道の話のみは、竜之助の気をそそる唯一ゆいのものです。

「して、貴殿は鹿兒島の御藩でござるか」

「いかにも。以前は島津の家中、今は天下の素浪人すろうにん」

「左様でござるか。薩州は聞ゆる武勇の国、高名のお話なども多いことでござろう」

「薩摩武士さつまぶしの高名が知りたくば——」

ハツと思うまに、密着くつつしていた二人の身が枯野からだの中に横へ飛び退のいて、離るることまさに三間です。

四

飛び退いた時に、双方ともに刀の柄つかに手がかかつて、そして何も言わず、睨み合いです。刀は共に未だ抜いまかず。竜之助は、この大胆なる壮士の挙動をものしと思つた。この俺を、大

菩薩の頂いただきで老巡礼に遭あわせたと同じ運命に逢わそうとは片腹痛い。

蒼白い皮膚の色に真珠のような光を見せて、切れの長い眼は、すーっと一文字に冴さえる。人を斬らんずる時の竜之助の表情はいつもこれです。

「薩州鍛治かじの焼刃やきばをお目にかけてようか」

壮士は、大の眼で竜之助を睨めながら、かの四尺もあらん刀の柄ちようを丁と打つ。

「篤とくと拝見致そう」

まだ双方ともに抜かなかつた。

「待て、待て、ちと齒はごたえのある勝負がしてみたいわ」

かの壮士は竜之助の氣勢を見てかえって喜んだ。腕に覚えがあればこそ、刀の抜きばえのある相手と見込んだものでしょう。

「ゆつくりと果し合はたあい——それは至極面白しじくそうだ」

竜之助は、微笑を以て言下に果し合とばしりいの申込みを引受けて、その微笑の余沫を冷やかに壮士の面かおに投げる。壮士も剛胆なもので、従容自若しょうようじじやくとして懷中から紙を取り出して、

「後日のために一札いっさつを立て置きたい、筆はないか」

竜之助は黙つて、矢立を出して壮士に授けます。筆の尖さきを口で嚙んで、壮士は紙に大きく書き出したのは、

一

仲裁無用

果し合あい

二

味なことをやる。

なんにしても、ここは往還に近い。刃の音を聞いて駆けつける者のなかには、よけいなお節介せつかいが飛び出さんとも限らぬ、この札を立てて、あらかじめ予防線を引いて、一方が一方を片附けるか、双方ともに仆れるかまで、無名の師いくさをやり通そうという準備であらう。とにかく物慣れた仕業しわざである。

竜之助は冷然として、その書き終るを見てみると、壮士はその紙を持って前後を見廻したが、傍かたえに大きな松の樹がある、小柄こづかを抜いてその一端を突きさして、あとの隅すみを克明こくめいに松脂まつやにで押える。

「いざ、お仕度したく召されい」

「心得て候」

壮士は、刀の下緒さげおを櫛たすきにする。竜之助は笠を取って、これも

同じく刀の下緒が襷になります。

驚くべき長い刀の鞘を払って、上段にとって、曳と叫ぶ、ずいぶん大きな声です。熟練した立合ぶりです。その技倆の程はまだ知らないが、立ち上って、まず大抵の人の荒胆も挫ぐというやり方。なにしろ真剣の立合を茶飯のように心得たものでなければ、こうはいかないはずです。

一方、竜之助は同じく抜き放って、これは気合もなく恫喝もなく、縦一文字に引いた一流の太刀筋、久しぶりで「音無しの構え」を見た。無名の師、尋常の果し合いはなかなか骨が折れる、まして敵の様子が海の物とも山の物ともわからない場合において、得意の構えに身を守り敵を窺う瞬間は、いずれも気が張るのです。

焦き込みもせず……無言のまままで青眼にとった刀。こつちが

嚇おどしても手答えがない、叫んでも反応がない……自ら薩州の浪人と名乗る壮士は竜之助の太刀ぶりに、やや意外の念を催します。

道具をつけての稽古ならば、体当りで微塵みじんに敵の陣形をくずしてみたり、一か八かいちばちの初太刀しよだちを入れてみる。当れば血を吸い骨を啖くちうことを好む刃やいばと刃とでは、そうはいかない。

壮士は上段の刀を振りかぶったなりで、頻しきりに気合と恫喝とを試みて竜之助の陣形を覗うかがうているが、その静かなること林の如く、冷やかなること水の如しです。打ち込んだら、こつちのどこかへ来る。それがどこへ来るか、さっぱり見当けんとうがつかぬ、浅く来るか深く来るかさえ見当がわからないのです。

時節がら人の通りが少ないといっても、名にし負う京と大阪とへの追分に近いところ、

「あれ、喧嘩けんかがあるそうな」

「武家と武家との争闘いさかいじゃ」

「おお、抜きましたぜ」

「抜いた、抜いた」

「長い刀やな」

「あれ、危ない」

気の弱いものには、真剣勝負は見えていられない、袖おもてで面おもを蔽おほうて急いで通り去るのが尋常の人です。怖いもの見たさの連中のみ遠巻きにして——それとても息を凝こらして、片足は逃げられるように、スワというとき腰を抜かさずに走れるだけの胆力を持ったものに限るのです。

白昼しらは、白刃やいばの立合は、おそろく凄かふといものの頂上でありましよう。月にかがやく刃やいばの色、星にきらめく兜かぶとの光などは、殺気を

包むに充分の景情があります。ここには、人と人との血氣、劍と劍との殺氣、それが全くむきだしに、青天白日、八百万やおよろずの神の照覧ましますところにおいて行わるるのであります。ことに、竜之助を知つて、その面かおの刻々の變化——變化と見えざる變化を見分ける人があるならば、何者とも知れず、来きたつて八万四千の毛孔を揺ゆつて行くとや疑うであらう。

この立合をながめていたもののなかに、一人の物好きがあります。最初は抜からぬ顔で人の後ろに立っていたが、ジリジリと一足前へ、二足前へ、余の連中が一寸二寸と後ろへさがる間に、この男のみは知らず知らず前へ出て行くので、水が流れて岩がおのずから進むように見えます。

「仲裁無用」かの松の樹の貼札はりふだの下まで来て突つ立って、じつとこの果し合いを見ている。脚絆きやはん足袋たび草鞋わらじ、菅笠すががさは背中に、武

士ではないがマンザラ町人でもない——手に四尺五寸ほどある櫂かしで出来た金剛杖こんごうづえまがいのもをついていました。

世間には、さまざまの変人がある、好んで危あやうきに近寄るは変人のなかの愚ぐなる者。

壮士の額にはようやく汗が滲にじんできた、それと共に気がジリジリと焦じれ出すのがわかります。この時、竜之助の足許あしもとがころもち進む。

壮士の踵かかとがころもち退く。上段の太刀をおもむろに下ろして、中段に直します。

「構いかんえの如何とんちやくに頓着せず、立合ひけつうや直ちに手の内に切り込み、そのまま腹部をめがけて突き行けば必ず勝つ」とは、千葉の道場などでよく教えた立合の秘訣ひけつで、機先を制して勝ちを咄嗟とつさにきめるか、さもなければ、罍を高くして持久戦の覚悟をきめ、そ

うして後に根気で勝つ。壮士は最初の法をとつて、勝ちを一気に占める考えであつたが、その術を施す隙すきがなかつたので、やむを得ず、相方ともに楯たてをついての睨み合いです。

関東の剣客で、その立合つた限りにおいては、竜之助の音無しはかの構えを破り得るものがなかつたのです。かの壮士は図はからずもその術にひつかつたものです。降りみ降らずみ五月雨さみだれの空が、十日も二十日も続く時は、大抵の人が癩癩かんしゃくを起します。鬱陶うつとうしい、忌々いまいましい、さりとて雷が鳴るまでは、どうにもならぬのが竜之助の剣術ぶりです。壮士の癩癩はついに雷となつて破裂した。

「やあ！」

切り込んだ初太刀しよだち。

その出る頭かしらこそ音無し流のねらいどころです。

どちらが斬つたか斬られたか、刀と刀は火花を散らして、一合いちごうすれば、両人の身は四五間離れて飛びます。どちらにも怪我けがはなかつた。透すかさず壮士は再び上段の構えでジリジリと寄る。竜之助はもとの如く、双方ともに以前の形をとつて進むだけです。

この一合した時に、立っていた怖こわいもの見たさの連中は、「わっ！」

とわめいて、横になり縦になつて、遠いのは一町、近いので五十間も転ころげ出したが、双方ともに傷つかず、また陣形を立て直したのを見てソロソロと舞い戻る。

棒を杖ついた商人体ていの不思議な人物のみは、自分が検査役かの如き気取りで、平然としてもとの立場を動かず、そのくせ、両陣の争いはいいよその身に近くなつてきています。

壮士も、胆気一方の人ではない、術も充分である、相撲すもうなら

ば四ツに組んだので、水を入れ手が無い以上は、取り疲れて、死ぬまで組む。力限りの争いかと見れば、意外にも今度は、目に見えないほどずつ竜之助の太刀先が進む。進み、進むと、壮士は脂汗あぶらあせをタラタラと、再び中段にしてジリジリと退く。その退くこと五分なれば、竜之助の進むことも五分、一寸なれば一寸。音もなく飛んだ刀は壮士の小髻こびんをかすめて、再び刃の音の立つ時、壮士は鳥の如く後ろへ飛び退さがる、竜之助は透すかさずそれを追いかける、受けて、また後ろへ飛ぶ途端に、無残や大の男は、石に躓つまずいて挫じょうと横ざまに倒れる——この時まで壮士は足駄あしだを穿あいていたものです。倒れたものを、起しも立てず拝み討ち——誰が見ても、この運命はもうきまった、倒れたのが斬られる、倒れないのが斬る（事實は必ずしもそうであるまいが）——その決勝点で邪魔が入ったというのは、かの棒を持っていた変人が、

「待った！」

りゆうりゆうと片手で振った櫓かしの棒に、仲裁無用の定規おきてを破らせたことであります。

五

竜之助と、薩州の壮士と、棒を持った変人と、三人の姿を山科やましなの奴茶屋やつこぢやの一間で見る事ができました。三人まるくなつて、酒を酌くみかわしながら、薩州の壮士曰いわく、

「不思議な流儀もあつたもんじや、えたいが知れん、俺も一刀流の道場はたと廻つてみたがな」

棒を持った変人は竜之助に代つて、

「うむ、この人の剣術は一流じや、てこずらぬ者は珍らしいよ、

関東の剣術仲間では音無しと名を取ったものでござる」

「なるほど音無し、音無しに違いはない、なんにしても珍らしい、関東には変ったのがある、ハハハハ」

高く笑う。

「西国にもずいぶん変ったのがござるようじゃ、貴殿のお差料さしりょうなどもその一つ」

「うむ、これか」

壮士は、座右の長い刀を今更めかしく取り上げて、

もんどのしょうまだきよ
「主水正正清じゃ」

「拝見致す」

型の如く鞘さやを払って、つくづくと見る、相州伝の骨法こっぼうを正確

に伝えた薩摩鍛冶の名物。竜之助もまた傍からじつと見て、

「なるほど」

「国の習いで、抜けば鞘を叩き割るのが、血を見ずに鞘へ納まつたは今日が初め、まあ仲裁ぶりに愛めでて不祥ふしようするわ。時に貴殿のは」

竜之助の武蔵太郎、これも如法によほうに見納めて、

「切れそうだ、だいぶ血を嘗なめとるな」

「今日も一つ、嘗そこめ損うたうた」

「それはこつちの言うことじゃ」

二人は面を見合つて笑う。壮士のは、明けつ放しの笑い方、竜之助のは苦笑い。

「なんにせよ、二つの獲物えものを取つて押えたのは俺わしが棒の手柄」

商人体の変人は、座敷の隅の棒を横目で見ながら言い出すと、
壮士は、

「あれは何だ、不思議な棒だな」

「このごろ大阪の相撲どもが、毛唐けとうの足払いと名づけて拵こさえよる、それを一本貫うて来た」

「ドレ、見てやる」

壮士は、立つてその棒をさげて来た——これは力士小野川が水戸烈公の差図さしずにより、次第によらば攘夷じょういのさきがけのためとて、弟子どもに持たせた檣の角棒。

うちとけて三人は飲み合つて、最初になすべきはずのを、いざ別るる時になつて名乗り合つてみると、壮士の言うには、
「拙者は薩州の田中新兵衛」

田中新兵衛は飄然ひょうぜんとして、どこへか行つてしまった。

あとに残つたのは竜之助と、かの変人、実は変人でも愚物ぐぶつでもない、水戸の人で山崎讓ゆずる。新徴組の一人で、香取流かとりの棒をよ

く使います。竜之助とは江戸時代からの知合いで、はからずあの場へ来合わせて仲裁を試みたもの。

田中去つて後、竜之助と山崎とは水入らずの旧知で、

「時に吉田氏、その後の雲行は、いよいよ穏かでないぞ」

「うむ、そうか」

「清川八郎が手で、新徴組の大部が江戸へ帰つたことは聞いたか」

「それは聞いた、横浜の毛唐けとうを打ち攘はらう先鋒せんぽうとやら」

「清川は食えぬ奴、なんというても新徴組第一の人物」

「そうかも知れぬ」

「毛唐を打つというも、実は江戸で事を挙げる、新徴組をダシに使うて幕府を覷ねらう奴じや」

「なるほど、あいつは放ほつておいたら、えらいことをしかねな

い」

「芹沢、近藤、土方など、幾度もあいつが首を覗うたが、運が強い」

「うむ」

「ところが、天運めぐりめぐって、ついこの間、首尾よく清川を討ち止めた」

「ナニ、清川が殺された？」

「いかにも。芝の赤羽橋で、速見又四郎、佐々木只三郎らの手で、見事にしてやられた」

「やつも、千葉の高弟で手は利きいていたはずだが」

「佐々木も速見も聞ゆる使い手じゃ、多勢で不意をやられてはたまるまい」

「うむ——そうすると新徴組は瓦解こわれたか」

「壊れはせぬ、二つに割れた。最初、江戸から京都へ上つたのは総勢二百五十人、それは大方、今いう清川が手で江戸へ帰つて、残るは芹沢と近藤を頭に十四人」

「うむ、僅か十四人——」

「それが中堅となつて、新たに新撰組というのを立てた、もとの新徴組の返り新参もある、諸国から腕節うでぶしの利く奴も集まる、みぶ壬生の南部屋敷に本営を置いて、芹沢鴨と近藤勇を隊長に、土方歳三と、新見錦山と南敬助とが副将じゃ」

「そうか」

「拙者もこんな風なりをして、浪人どもの搜索と、腕の利いた同志を探しに歩いている。よい所で行き逢つた、早速壬生へ行こう」

「待て、待て」

竜之助は、直ちに壬生へ走せはつけることについて、多少考え

ねばならぬことがある。

「芹沢と近藤との間柄はどうじゃ、二人とも無事に組んでいけるかな」

竜之助に言われて、山崎は眉根まゆねを寄せ、眼を光らかにして、

「それだそれだ、そこの雲行きが危ないて」

「危ない？」

「どのみち、雨となるか風となるか、組の中にも芹沢派と近藤派とは、油と水じゃ。困ったものじゃて」

「生国しやうごくから言えば同じ武蔵、拙者は近藤派によしみが深い、しかし、芹沢には義理ていがある」

竜之助は思案の体です。

「うむ、拙者も生国は水戸じゃ。芹沢とは同国なれども、人物は近藤が一段上と思う」

山崎は、新撰組両隊長の器量を一寸ちよつとばかり比べてみて、

「どうも、近藤派の方が、人望があるようじゃ、芹沢は乱暴でいかん、近藤は目先が見える、芹沢は人に嫌われる、近藤は人に怖れられる……ゆくゆく新撰組は近藤のものであらう、なりゆきに任せて、拙者は黙って見ている」

芹沢鴨は水戸の天狗党の一人です。芹沢鴨とは変名で、実は木村継次つぐじという。同じ水戸の山崎が見て、団扇うちわを近藤に上げるところより見れば、双方の相違がおのずからわかるとも言える。「いずれにしても、拙者は、これより壬生へ行くことは見合わせ、ほどよき宿をとつて、ひそかに芹沢と会いたい、そうして身の振り方をきめる」

「そうか、まあゆつくり都見物でもするがよい、隊へ入ると気が忙しくなる」

「芹沢に、拙者が上つて来たと伝えてくれ、近藤、土方には知らせたくない」

「よし、そう言おう。宿はどこへ取る」

「左様、目立たぬよう、然るべきところはないか、周旋を頼む」
「六角堂の鐙屋あぶみやというのを拙者は知っている、それへ紹介しよう」

「よろしく頼む」

「こんな話をして酒を飲み合い、微醺びくんを帯びてこの茶屋を出ると、醍醐だいごから宇治の方面へ夕暮の鴉からすが飛んで行く。」

「それはそうと吉田氏、京都へ入ったなら、滅多めったに刀は抜かぬがよいぞ、血の気の多いのがウヨウヨいる、今の壮士のような奴が」

「あの命知らずには驚いた」

「しかし、あんなのは珍らしい、全くの命知らずじゃ。そうそう、何と言ったかな、あいつの名前は」

「薩州の田中新兵衛と聞いた」

「田中新兵衛……そうか、覚えておくことだ、あんなのが好んで暗殺をやる。去年、四条磔しじょうがわらで九条家の島田左近さこんを斬つたのも、まだ上らぬのじゃ」

「暗殺はやが流行はやるそうだな」

六

壬生みぶの村から二条城まで、わざと淋しいところを選んで、通りを東に町を縫ぬい、あてもなく辿たどり行く人影に見覚えがある。まだ前髪立ちの少年なるに、腰には厳いかめしき刀を差し、時々

せんす かなめ つかがしら
扇子の要を柄頭のあたりに立てて、思い出したように町並や、
道筋、それから仰いで朧月おぼろづきの夜をながめているのは、いつのま
にこの地へ来たか、その人は宇津木兵馬であることに疑いない
のです。

世は混乱の時といえ、さすが千有余年の王城の地には佳気が
あつて、町の中には陰呑けんのんな空氣が立罩たてこめて、ややもすれば嫉刀ねたば
が走るのに、こうして、朧月夜に、鴨川の水の音を聞いて、勾配こうばい
の寛ゆるやかな三条の大橋を前に、花に匂う華頂山、霞に迷う如意にょい
ヶ岳たけ、祇園ぎおんから八坂やさかの塔の眠れるように、清水きよみずより大谷へ、烟けむり
とも霧ともつかぬ柔らかな夜の水蒸氣が、ふうわりと棚曳たなびいて、
天上の美人が甘い眠りに落ちて行くような氣持に、ひたひたと
浸つけられてゆく時は、骨もおのずから溶ける心地こころちがする。朧月
夜とはいふものの、四月もすでに半ば過ぎ、空のどこに月あり

とも見えねど一帯に明るい。曇りにしては気分が軽い、霽はれにしてはしつとりとした、都の春の宵よいの色としては、申し分のない夜でありました。

兵馬は橋の上へ来てから、大事なものを踏むように、わざとゆつくりゆつくり歩いていきます……朧月夜もふけて丑三うしみつ過ぎで、無論、人の通ることは宵から数えるほどしかなかったのですから、この深夜には誰憚たればばるものもない、千金にも替え難き都の春の夜を一人占めにして歩いているようなものです。

京都に来てても兵馬は、ワザと罪なき人を斬つたり、喧嘩けんかを買つて出たりすることはしなかった。暇があれば、壬生寺みぶでらの本堂に籠ぶつそうつたり、深夜、物騒な町を歩いてみるくらいのこと、いままでは至つて無事でした。竜之助が悠々と、途中で道場荒しなどをやつて、日数ひかずを多くかけて京都まで来る間に、兵馬は新徴

組と共に、一直線にこつちへ来ていたので、京都の経験は兵馬の方が一月の余も上であります。

すべての消息から、竜之助が京都へ落ちたことは真実である、京都で必ず探し当てる、これも兵馬が夜歩きをする一つの理由でありましょう。しかしながら、京都へ来てみて、天下の形勢というものを見たり、諸藩の武士の、国家を一人で背負つて立つような意気込みを見ると——兵馬はどうも、知らず知らず自分が大海へ泳ぎ出したような心持もするのです。

兵馬はこの夜、浪人者が数人、隊をなして一つの駕籠を守つて行くのを三条の通りで見かけました。その後ろ姿を見て、兵馬は合点のゆかぬ思いをしながら壬生の屯所へ帰つて来たのであります。

「あれは組のうちでたしかに見た男」

夜歩きをして壬生へ帰つた翌朝、隊長の近藤勇から使が来て、急に会いたいというから兵馬は、勇の前へ出ると、勇は刀架に秘蔵の虎徹こてつを載せて、敷皮の上に、腕を拱こまねき端然と坐つていたが、兵馬を見る眼が、今日はいつともより陰けわしい。

「宇津木、もう夜歩きはならんぞ」

「は？」

勇は、兵馬の不審がる面かおを、上から見据えているのです。

「隊長、それは——」

「うむ、夜歩きをするな」

近藤の語気には含むところがある、何とも理由は明かさず、頭からガンと夜歩きを差止めて、まだ何か余憤があるようです。しかし言いわけをしても駄目である。近藤が言い出したら、こ

れは是非の余裕がないことを知っていますから、兵馬は黙つて控えている。

勇は筋骨質の人です、頬の骨は磐石ばんじやくの如くに固く、額は剛鉄あらがねを張つたように強く、その間から光る眼玉に、どうかすると非常な優しみがあるが、少し機嫌きげんの悪い時は、正面まともには見てもらえない陰しさ、ほとんど寧悪どうあくの色が現われてきます。もし誰か勇に会つて、寧悪な眼の光を浴びせられたものがあるならば、その翌日の朝になると、その人は、必ずどこかの辻つじに、二つになつて斃たおれているのが例であります。兵馬はいま、勇が少しくその機嫌を損じていることを認めます。勇の怒りの怖るべきことも知っています。しかしながら自分に疚やましいことはない——今は弁解しても駄目であるが、おのずから事情のわかる時がある、事情がわかれば勇の気象きしようはカラリと晴れる。そのことをよく吞

み込んでいたので、

「心得ました、いかにも夜歩きは差控^{さしひか}えます」

「よし」

兵馬は、これで自分の詰所^{つめしよ}の方へ帰つて来ます。

井戸側のところへ来ると、新撰組隊士が二人ほど、水を汲んで面を洗つていましたが、

「井村、昨夜は晩^{おそ}かったな」

「うん、飛んだ寢坊をしちまつた」

「どこへ出かけた」

「悪いところへ行つた」

二人の話し合いを、兵馬が通りがけに、ふと耳に入れて気がつく、あの井村の様子——昨夜の駕籠を守つて行つた浪人者のうちの一人によく似ている。

ここに一つの事件がある、それは新徴組の隊長芹沢鴨が、京都のある富家の女房を奪^{きた}い来^{おの}つて己^{めかけ}が妾同様にしてしまったことです。芹沢はじめその手に属するものの横暴は今に始まったのではないが、今度のやり方は強盗に類することであつた。そうしてその話が兵馬の耳にまで入つたのは翌日のことで、兵馬はふと、前夜の夜歩き^{ちようか}の時に見かけた浪人ども——それと芹沢が奪^{きた}い来^{おの}つたという町家の女房との間に脈絡があるように思われてならぬ。ことにその浪人どものうちの一人は、たしかに芹沢配下の井村に違いないと思われるから、いよいよ以て奇怪に感じてその翌日、隊の門を潜^{くぐ}ると、ちようど出^{であいがしら}会頭のやうに物置の方から出て来た井村。

「井村君」

兵馬が呼び留めると、

「や」

井村はギョツとしたようでしたが、苦笑にがわらいをして、

「宇津木君か」

「井村君、君にちよつと尋ねたいことがある」

「何だ」

「近頃、君の方の手で女を取調べたことがあるか」

「知らん」

知らんというけれども、井村の言いぶりが狼狽ろうばいしている。

新徴組には芹沢派と近藤派とがある。両派の暗闘は容易なものではない。宇津木兵馬はどちらかと言えば近藤派で、芹沢の人物を好いてはいない、それに机竜之助まといを芹沢が隠していると、いうことを聞いているから、今は芹沢がまとい的のようになっている。

兵馬は、これから一層、芹沢の一挙一動に注目することに決心し、今日も夕方、かの井村と、も一人の新参浪士をつれて芹沢が屋敷を出かけたのを、兵馬はそつとあとをつけて行きます。彼らは本国寺の寺中へ入って行くから、兵馬は寺の門を潜らず、しばらく遠のいて、門の中を見張っていると、ほどなく井村と新参の浪士と二人は面の相好を崩して門を出て来ましたが、彼等は壬生へは引返さないで、本願寺裏手の方を四辺憚らず笑い興じながら島原口まで来ました。

これからは田圃——五六丁を隔ててその田圃の中に一廓、島原傾城町の歓楽の灯は赤く燃えております。

「やあ、あの灯を見ると胸が躍るわ。しかし我々共の楽しみは罪が浅い、隊長のはなかなか罪が深いのう」

井村のこの声がひとしお大きく田圃の中で響き渡ると、

「アハハハハ」

ふたり声を合せた高笑いで、あとはまた断続してよく聞き取れない。新参の浪人がふいと後ろを振返り、

「誰か来るようじゃ」

井村の耳に囁くと、歩みをとどめて、

「うむ、足音がする」

島原から一貫町までは人家がない、人が来れば見通しがつく。

「島原通いであろう、一番、嚇してみようか」

人を嚇してみるにはよいところ、朱雀野の真只中、近来ここ

では追剥と辻斬とが流行る、遊客は非常な警戒をした上でなけ

れば通らないところです。

兵馬は二人の立ち止まったところへ押しかけて、

「ちよつと物をお尋ね申す、壬生の地藏へはどう参りましたう

な」

「ナニ、壬生の地蔵へ——」

「壬生の地蔵寺から南部屋敷の方へは？」

「南部屋敷を尋ねらるる、どうやらその声は聞いたようじゃ」

これは井村の声で二足三足、兵馬の方へ近寄つて来ます。

「やあ、宇津木君ではないか」

「その声は井村氏か」

井村は、こんなところで兵馬に遭^あうことをまことに意外と思
い、同時に不安が湧いて来るらしく、

「どうして今頃、こんなところを……貴殿にも似合わない」

「七条へ参つての帰りがけ、つい道に迷うて」

「ハハ、なるほど、この道は貴公らの迷うべき道じゃ。ここを
真直ぐに行くと、あの明るい里。あれ、微かに三味太鼓の音も

聞ゆるは、あれが我々共の極楽世界。君のたずぬる壬生のお寺は、あれあの高い屋根の棟がそれよ」

田圃の中に、黒く高く湧き立った地蔵寺の大屋根を指す。

「あれが地蔵寺……なるほど、そういえばここが島原、それでわかった」

「待て待て、宇津木」

「何か用か」

「これから直ぐに壬生へ帰るか」

「帰る」

「それはいかん、ここまで来ては、もう逃がしつこなし」

井村は兵馬の袖を捉えて、非常に気味の悪い言葉遣いで、

「つき合え、一緒に来い」

「どこへ」

「恍^{とぼ}けるなよ、我々が行くところへ来い」

「いや、拙者は、そうしてはおられぬ」

「わからずやを言うなよ、隊長の近藤君や、芹沢君はじめ、みんなこの島の定連^{じょうれん}なのじゃ、貴様、若いくせに、ここまで来て素通^{すとお}りという法があるか」

「拙者は左様な粹人^{すいじん}とは違う」

「いや、そうでない、貴公のようなのが、女には騒がれる。都へ来て島原の太夫^{たゆう}を知らんというは話にならんテ、なあ溝部^{みぞべ}」

「それに違いない」

「それ見ろ、一度この中へ入って済度^{さいど}を受けてみんなことにや、世の中の人情というものの極意^{ごくい}がわからん」

壬生と島原とは呼び交わすばかりの間である。兵馬としても、ここに島原のあることを知らないはずはないが、井村はしきり

に兵馬の袖を引張つて放しません。

その言うがままに行つてみたかどうか、そうして彼等の為すがままに任せておいて、それから、何かを機会に調べてみたら、それも妙ではあるまいか。

兵馬は、ふと、こんなことを思い出して、強しいて袖を振り放そうとしないうちに、もう遊廓ゆうかくの一町ほど手前まで来てしまいました。

「よし、行くところまで行つてみよう」
ついに大門おおもんの前まで来た。

「これ見ろ宇津木、ここが大門で、それここに柳があるが、これが有名な出口の柳というものじゃ。入口にあつても出口という、これいかに。島原七不思議の第一はこれじゃ。中は昼より明るいぞ。一足入れば歌舞の天女、生身しょうじんの菩薩ぼさつが御来迎ごらいどうじゃわ

い」

島原傾城町けいせいまちの夜は盛んなる眩惑げんわくを以て兵馬の眼の前に展開される。

七

島原の誇りは「日本色里いろざとの総本家」というところにある、昔は実質において、今は名残なごりにおいて。

今の島原は全く名残りに過ぎない。音に聞く都の島原を、名にゆかしき朱雀野すざくののほとりに訪ねてみても、大抵の人は茫然自失ぼうぜんじしつする。家並やなみは古くて、粗末で、そうして道筋は狭くて汚ない。前を近在の百姓が車を曳いて通り、後ろを丹波鉄道が煤煙ばいえんを浴びせて過ぐる、その間にやつと滅び行く運命を死守して半身不

隨の身を支えおるといふ慘めな有様であります。

安永から天明の頃、江戸の俳諧師二鐘亭半山なるものの書いた「見た京物語」には、

「見た京物語」には、

「島原はまはり土塀にて甚だ淋し、中の町と覺しき所、一膳飯

の看板あり」

とあつて、それよりやや降り、

「島原の廓、今は衰へて、曲輪の土塀など傾き倒れ、揚屋町の

外は、家も巷も甚だ汚なし。太夫の顔色、万事祇園に劣れり」

とは、天保の馬琴が記したものである。

ましてや、それよりまた小一世紀を隔つる大正の今の時、問題

の土塀もくずれ果てて跡方もなく、小店には、日々に空家が殖え

て、大店は日に日に腐ったまま立ち枯れて、人の住まなくなつ

た樓の塗格子や、襷め果てた水色の暖簾に染め出された大きな

定紋じようもんが垢あかづいてダラリと下つた風情ふぜいを見ると、「嵯峨さや御室おむろ」で
馴染なじみの「わたしや都の島原できさ、らぎという傾城けいせいでござんすわ
いな」の名文句から思い出の優婉ゆうえんな想像が全く破れる。涙なが
らに「日本色里の総本家」という昔の誇りを弔とむろうて、「中なかの町ちよう」
「中堂寺ちゆうどうじ」「太夫町たゆうまち」「揚屋町あげやまち」「下しもの町ちよう」など、一通りその隅々
まで見て歩くのはまだ優しい人で、「ナンダつまらない」その名
前倒れを露出むきだしにしながら、とにかくここで第一の旧家といわれ
る角屋すみやの前に足をとどめてみても、御多分ごたぶんに洩れぬ古くて汚な
い構えである。侮り切つていきなり玄関から応接を頼むと、東
京では成島柳北時代に現われた柳橋やなぎばしの年増芸者としまげいしやのようなのが出
て来て、「御紹介のないお客さまは」と、極きわめてしとやかに御辞
退を申し上げる。

これは、物に慣れない遊子に対する特殊の待遇ではなく、も

し血氣に逸る半可通が新式の自動車を驅り催して正面から乗りつけて行つても、「御紹介のないお客様は」の一点張りで、その来る者の、自動車であろうと、金鎖きんぐさりであろうと、パナマ帽であろうと更に驚かないのですから、ここにおいて「島原未だ侮り易やすからず」と最初の独断をやや悔いはじめるものもあるし、頑迷いよいよ度すべからず、これだから「滅びゆく島原」だと匙さじを投げる者もある。

幸いに、許されて中に入ることの光栄を得たものにしてからが、まず何となしにばかしくなる。荒削りあらけずの巨大な柱が煤すすけた下に、大寺院の庫裡くらで見るような大きな土竈へつこいがある、三世紀以前の竜吐水りゅうどすいがある、漬物の桶みたようなのがいくつも転ころがっている。何のことはない、二十代もつづいた大庄屋の台所おおしやうやへ来たようなものです。

おまけに、長押ながしには檜、棒、薙刀なぎなたのような古兵具ふるつわものが楯たてを並べ、玄関には三太夫のような刀架かたなかけが残塁ざんるいを守つて、登樓の客を睥睨へいげいしようというものです。

恐る恐る座敷へ通つて見ると、京都式の天井は低く、光線のとおり具合は極めて悪い。しかしながら、そこにもここにも底光そこびかりがある、低くて暗いのは必ずしも浅くて安っぽい意味でない、というような感じも幾分か出て来て、そうしておもむろに間毎まごとの襖ふすまや天井などについて説明を求めてみると、前の柳北時代の柳橋の老妓ななかいのようなのが（多分、仲居の功労を経たものである）別に誇るような色もなく、新来の田舎客のためによく説明の労をとる。

第一を「御簾みすの間ま」と言ひ、第二が「奥御簾の間」、第三が「扇の間」で、畳数二十一畳、天井には四十四枚の扇の絵を散ら

し、六面の襖の四つは加茂かもの葵祭を描いた土佐絵。第四「馬の間」の襖は応挙、第五「孔雀くじやくの間」は半峰、第六「八景の間」は島原八景、第七「桜の間」は狩野常信の筆、第八「囀かこいの間」には几董きとうの句がある。第九「青貝の間」は十七畳、第十「檜垣ひがきの間」は檜垣の襖、第十一「緞子どんすの間」は緞子を張りつめる。第十二「松の間」は、十六畳と二十四畳、三方正面の布袋ほていがあつて、吊天井つりてんじようで柱がない、岸駒がんくの大幅たいふくがある。

なお委くわしく聞いてみると、間毎間毎にもいちいち由緒ゆいしよと歴史とがあつて、やれ「青貝の間」は螺鈿らでんでござるの、「檜垣の間」はこれこれの故事で候そうろうの、西郷さんのお遊びの部屋は、いつもこの「松の間」の話の洩れないところにきめてあつたの、西郷さんのお相手は小太夫あいかたといつて、月照げつしょうさんと一緒に遊びに来られて、その相方は花桐太夫はなぎりだゆうであつたなど、和尚もなかなか罪を

造つたものだと思わせる話までも聞かせてくれる。

日本の遊女町というものを、社会史上の一つの現象と見て、この後とうてい復活の望みのない日本色里の総本家の名残りのために、この島原の如きも、物好きな国粹（？）保存家が出て、右の角屋、或いは輪違わちがひその他の一部の如きに相当の方法を講じておかないと、やがて社会史の一角に、多少の参考材料を失うかも知れない。それで、右の角屋の如きも二百七十年以前、島原始まつて（すなわち寛永十八年、六条から今の地に移つた時）以来の建築であつて、そのほかにもこれに類するものがあるとしてみれば、時代の家屋の建築上からも一個の参考物である、或る意味からこれを尊重する氣になつて、素見ひやかしに來た道樂者が思わず知らず社会学者となり考古学者となつてしまします。

島原が秀吉から許された天正十七年は、江戸の吉原よしわらが徳川か

ら許された元和三年より三十年の昔になる。大阪の新町も、その創立を元和から寛永の頃とすれば、いずれにしても島原より弟であり妹である勘定になります。

そうして、柳町から六条へ移り、「新屋敷」の名が「三筋町」となり、三転して今の朱雀へ移って、「島原」の名を得たのが、寛永十八年ということ。

「去んぬる頃より一つ合せて、七条西朱雀、丹波街道の北に島原とて、肥前天草一揆のとりこもりし島原の城の如く、三方はふさがりて、一方に口ある故に、斯様には名け侍り」（浮

世物語）

みやこめいしよずえ
都名所図絵には、

「また寛永十八年に今の朱雀野へ移さる、島原と号くることは、その昔、肥前の島原に天草四郎といふもの一揆を起し動

乱に及ぶ時、この里も此処ここに移され騒がしかりければ、世の人、島原と異名をつけしより、遂に此処の名とせり」

切支丹禁制きりしたんの記念が、遊女町の名によつて残されたことを思うと、因縁いんねんもまた奇妙な感じがします。ことのついでに、日本における遊女というものの沿革えんかくを老人に聞いてみると、古いところは万葉まんようあたりまで溯さかのる。その後、肥後の白川しらかわ、都近くは江口かんざき、神崎、東海道の駅々には、大磯、黄瀬川きせがわ、池田などに名を謳うたわれた。遊女屋としてやや体を成しかけたのは、播州ばんしゅうの室津むろつあたりであらうとのことです。

平家が亡ほろんで、辛かろうじて生き残つた官女たちが身を寄せるところに困つて、みすみす人の遊びものになり、蟹かにも平氏を名乗つて無念の形相ぎようそうをする海辺に、浮かれ浮かれて身を売つた。長門ながとの赤間あかまヶ関せき、播州の室津などはそれである。ことに室津は都近

い船着きであつたから、遊里の体裁ていさいをなすまでに繁昌したものと見えます。

官許遊廓の根源こそはこの島原。島原の歴史にもまた相当の盛衰榮枯があつて、三筋町七人衆の時代、すなわち灰屋はいや三郎兵衛に身受けされた二代目芳野の頃を全盛の時とすれば、祇園ぎおんの頭を持ち上げた時が、ようよう島原の押されて行く時であらう。そうして、この物語の時代、すなわち維新前後にパツとまた一花咲かせた。大小七十余藩の武士が一度に京都へ集まつた時、さびれかかった日本遊廓の根元地が、またも昔の權威を盛り返して、他場所で遊んで不首尾をした時は帰参が叶かなわなかつたけれど、島原での咎とがは帰参が叶つたという勢いでありました。

島原の木津屋という暖簾のれんのところへ、或る日のこと、百姓てい体の男が旅姿で、

「少々、お頼み申します」

これは裏宿七兵衛。

「お客さんか」

眉を落して、小緞子こどんすの帯を前結びにした三十前後の女が暖簾

をわけて姿を見せ、

「どちらから？」

「これはちと遠方から参りましたもので、御雪みゆきだゆう太夫さまのお館やかたはこちらでござりましょうか」

「はい、御雪様はこちらでありますが、あなた様はどなた」

「左様でござりましたか。私は関東の者でございますが、太夫

様にちよつとお眼にかかりたくて上りました」

「お前様が、あの太夫様に？ それは太夫様ご存じのことか」

「いや、お眼にかかつて申し上げたいことで、案内も存じませぬ故、宿へ着きますと早速これへ参りましたようなわけで」

「阿呆らしい」
あほう

女は輕侮の色を現わして、
けいぶ

「太夫様が、知己のちかづきない方に、そう容易くお目にかかるものか

いな、出直しておいでなされ」

引込んでしまおうとするのを、七兵衛は、

「あ、もし、太夫様にお眼にかかれぬならば、あの、お松と申す女の子が、このお家に御厄介ごやっかいになつておりますとやら」

「お松——」

「はい、このごろ関東から上りました女の子」

「おお、そんなことも」

女は様子ありげな七兵衛の風情ふうせいを見比べて、なんと思つたか、急に打消して、

「そんなお方も存じませぬわいな」

「それは困つた」

七兵衛はやや当惑の色。女はそれを見て、いくらか気の毒の念を催したものと見え、

「お前さん、太夫様に会いたいとならば会うようにしてお会いなされ、ただいまは揚屋あげやい入りでお留守じゃ、あとで伝えておきましよう」

「はい、それでは後刻ごこくまた伺いまする……それからあの、ただいま、太夫様に会うには会うようにして会えとおっしゃいましたが、それはどう致したらよろしゅうございましょう」

「それは、こんなところでなく、あちらに宏大な揚屋こうだいというものや、お茶屋さんというものがありますから、そこで聞いてごらん」

「関東から上ったばかりでございますから、トンと何もかも存じませぬ、失礼を致しました。それでは、もう一応あちらで聞き直しました上で、また後刻お伺い致しまする」

こう言つて、七兵衛は丁寧にお辞儀をして木津屋の前をいったん立ち去ろうとすると、道筋を、こちらへ、揚屋から帰る太夫の一行があります。

太夫の道中も島原がはじめ。道中とは太夫が館やかたと揚屋との間を歩く間のこと。

ずっと昔は毎月二十一日に、後には年に兩度、その後は年に一度、四月の二十一日、真行草しんぎようそうの三つの品の中、真の道中しんぞうは新艘

の出る時、そうしてこれは、最も普通の意味における道中、太夫が館と揚屋を歩くだけのこと。

かすみ

霞にさした十二本の簪、松に雪輪の刺繍の帯を前に結び下げ

はなふぶき

て、花吹雪の模様ある打掛、黒く塗つたる高下駄に緋天鷲絨の

はなお

鼻緒すげたるを穿いて、目のさめるばかりの太夫が、引舟を一

かむろ

人、禿を一人、だんだら染めの六尺帯を背に結んだ下男に長柄の

ながえ

傘を後ろから差しかけさせて、悠々として練つて来ましたから

のきした

七兵衛は、こちらの遊女屋の軒下に立つてその道中の有様を物

珍らしと見ていますと、右の一行が、木津屋の暖簾の中へ入つ

のれん

てしまい、そのあとから男が二人、黒塗りの長持のような大き

な箱を担ぎ込むところまで見ておりましたが、その箱の一方は、

しょうぎ

将棋の駒の形をした木札があつて、それに「御雪」と記された

きふだ

のを見る。

「もしもし、それへおいでのお客さん」

梅の花の振袖ふりそでを着た小さな禿かむろ、ちよこちよこと走り出て呼び

止めますから、七兵衛は振返りました。

「私でござんすか」

「はい、あの太夫さんが、お前に会いたいと申しまする、お入りなさい」

「それは有難う存じまする」

七兵衛が通された部屋には、古色を帯びた銀襖ぎんどうすまがあつて、そ

れには色紙しきしが張り交ぜてある。昔からこの地の名ある太夫の寄

せ書を集めたものであらうと、七兵衛は、その和歌の二つ三つを讀んでみましたが、自分には讀み抜けないのが大分あります。

七兵衛は教育を受けられなかった人間で、自分一個の器用で手

紙の文字や触書ふれがきの解釈ぐらゐは人並み以上にやってのけるが、悲しいことには、こんな優みやびやかな文字を見ると、男でありながらと、ひそかに額の汗を拭いて感心したり慚はじ入ったり。

九

木津屋の間で、七兵衛は手枕てまくらで横になり、朋輩衆と嵐山の方へ行つたというお松の帰りを待っています。

いま会つて、一通りの話をした御雪太夫の面影おもかげを思い返して、

道中みちで見た時とは違えひ物々しい飾りを取りはずし、広くて赤い襟えりのかかつた打掛うちかけに、華美はでやかな襦袢じゆばんや、黒い胴ぬきや、紋縮緬もんぢりめんかなにかの二つ折りの帯を巻いて前掛のような赤帯を締めて、濃い化粧のままで紅べにをさした唇、鉄漿かねをつけた齒並はなみの間から洩

るる京言葉の優しさ、年の頃はお松より二つも上か知らん、お松とは姉妹きょうだいのように思うていと言うたが、姉にすれば申し分のない姉、あんな姉があらばお松は仕合せしあわせである、お松のためにはこのままにして、あの太夫に任せておく方がけつく幸福か知らん。七兵衛はお松の身受けに來たのだけれど、來て見ればお松の將來についてまた變つた考えが出て來ます。

七兵衛はそれから、お松の身受けの金のこと、関東へつれて歸つてどうしようかということなどを、いろいろと考えているうちに眠くなつて、うとうとと夢に入ろうとすると、

「御免あそばせ——あ、おじさん」

眠りに落ちようとした七兵衛は、物音に眼をあいて、そこへ入つて來た美しい女の姿を見る。

「青梅のおじさんではないか」

女はこう言つて跪ひざまずいたので、七兵衛は身を起して、

「お松坊か——お松坊であつたか」

「はい」

お松の姿は、三度變つてゐる。第一は大菩薩峠の頂で猿と闘おいずるつた時の笈摺おしずの姿、第二は神尾の邸に侍女こしもとをしてゐた時の御守殿風ごしゅでんふう、第三はすなわち今、太夫ほどに派手はででなく、芸子げいこほどに地味じみでもない、華奢きやしやを好む京大阪の商家には、ちようどこのくらいの振合ふりあいをした嬢様がある。七兵衛はお松の侍女時代を知らなかつたから、その變つたことに目を驚かす。

「久しいことでございました」

お松はハラハラと涙。

「大きくなつたなあ、美しいものになつたなあ」

七兵衛の眼もなんとなしに潤うるおうてきます。

「もう、この世ではお眼にかかれなかつたと思ひました」

「ばかなことを言うな……なんの百里や二百里の道」

七兵衛も悲しくなる、お松も悲しくなる。

七兵衛の足では、百里や二百里の道はなんでもないが、お松の身が、この百里を隔てた西の都に来るまでには、容易ならぬ行路の悩みがある。

お松は、しばらく袂を面かおに押し当てたまま、しゃくり上げていました、

「いつ、こちらへお着きになりました」

「今日来たよ」

「ようここが知れましたなあ」

「うむ、ちよつとしたひつかかりで聞き込んだから、直ぐに飛んで来た。来て見れば、お前の身の上も、思つたより無事で、こ

うす、いなり、会えようとは思わなかった。そうして、わしは、お前をつれて江戸へ帰るつもりで来るには……来たが……今も、ここでおちおち考えてみれば、帰ったとてお前の頼るところもないようではあるし、わしも思うように世話をして上げるわけにはいかない。縁あつてこちらに來たものだから、いつそこちらで暮すもよいかも知れぬ。どうだ、お前の考えは。遠慮なく言つてごらん」

「有難う存じます、おじさん、どこへ行きましても、運の悪いものは悪いものでございますね、わたしは、もう諦めあきらました」

「どう諦めた」

「江戸へ帰りたいとも思わず、ここで一生を送りたいとも思ひませぬ……運には勝てませぬから、何事にも逆さかわらず身を任せて行くつもりでございます」

七兵衛は腕を組んで暫く考え、

「それでは……お前は傾城けいせいになるつもりかえ」

「この月中つきうちに、あのお雪様の妹分として、つとめをするように、きまつてあるのでござんすから……わたしもその気になつてしましました」

七兵衛は、考え込んだ上で、

「そう腹がきまれば、それでいいようなものだが、わしに言わせると、それでは済まぬ、わしはお前を遊女傾城にしたくはないというものだ」

「けれども、おじさん……」

「わしは、お前を救い出しに來たはずなのだ、なんとしても一旦はお前の身受けをせにやらぬ、それから先はお前の心任せこころまか、江戸へ帰ろうと、こちらに留まろうと、文句は言わないつもり

だが」

「身受けと申しましたが、おじさん……」

「お金のことなら心配しなくてもいい、それはいくらかかろうとも承知の上だ」

「有難うございます」

お松は、また涙を拭く。身受けをされて自由になることが、お松にとって嬉しくないことはない、もし帰るべき家があり、手をとって泣き合うべき親兄弟があるならば一層のこと。七兵衛にしても、この娘をつれて帰って、引合せてやる縁者えんじやがあるとか、思い合う男に添わせてやるとかいう的あてがあるならば、張合いがあるべきところだけでも、これを伯母のお滝に返してやろうか、または妻恋坂のお師匠様に預けようか——危ない危ない、ここに置くよりも危ない。そんなら、自分が引取って世

話をしてやろうか——いつ首が飛ぶか知れない身、なお危ない危ない。

「おじさん、わたしは、もし身受けをしていただくようになりますれば、あの沢井という山の中へ引込んで暮します」

「なんだ、沢井へ……沢井の何というところへ」

「あの万年橋という橋の下に、水車の小屋がありますそうな、そこでお米を搗いたり、粉を振ったりして稼ぐつもりでございませう」

「万年橋の水車で……あそこに知人でもあるのかな」

「あい、約束した人が……約束と申しますと、異なることに聞えましようけれど、わたしを親身にしてくれた人が待っているはずでございます」

この女を待っているというのは何者、約束した人とは誰。は

たしてそんな人があるならば頼もしい。

十

京に多き物、寺、女、雪駄せつたなお直し。少なき物、侍、酒屋、けん
どん屋、願人がんにんうんぬん云々。それがこのごろはどこへ行つても、肩ひじ
怒らした侍ばかり、多いものの二番目に数えられた女の影がか
えつて道の通りには甚だ少ない。

島原の廊くるわ、一貫町を出てから七兵衛は胸算用むなざんようをはじめました。

お松を身受けするのに、費用が四百両の頭を出る、百両を手金てきん
に置いて、あとの三百五十両、それをこれから工面くめんにかかる、
猶予ゆうよを三日間とつておいた。

せんぽんどおり
千本通で暮六ツくれむが鳴る。

道すがら町と人家の形勢を見て、そのつもりもなく壬生^{みぶ}の地蔵の前まで来ました。地蔵へ心ばかりの賽銭^{さいせん}を投げ、引返して表へ出ると例の南部屋敷の前。

「誰の邸だろう、大名にすればたしかに十万石以上」

壬生の村は、もう暗くなる。機^{はた}を織^おる箴^{おさ}の音が、この乱世に太平の響きをさせる。知らず知らず綾小路^{あやこうじ}を廻^{まわ}って見れば、田圃の中には島原の灯^ひが靄^{もや}を赤く焼いている。お松はあの中で何を思っているだろうと、七兵衛もそぞろ物の哀れを感じるのであります。

七兵衛は、いま壬生の南部屋敷から程遠からぬところの、とある一ぜん飯屋で飲んでいる。

「親方、いい酒だな」

「へえへえ」

「この鰻うなぎは、どこでとれるのかね」

「それは若狭鰻わかさうなぎでございます」

「これも、なかなかうまいね」

「へえ、なるたけいい物を売らんと、御近所やかまが喧やしゅうございます」

「なるほど、御近所にはだいぶ宏大なお邸があるようだ、お出入りがきついから、品もごまかしが利きかないのだね」

「まあ左様なわけでござりまする」

酒もよいし、鰻もよいから七兵衛も、陶々とろとろとよい氣持になつ

て主人と話し込んでゆく。

「お客様はなんでございますかい、お地藏様へ御参詣ごさんけいで」

「左様、今お地藏様へ参詣して帰りがけさ」

「今年は、どうですか、お地藏様もこの分では狂言がお流れに

なりそうで」

「狂言とは何だね」

「ナニその、壬生狂言と申しましてな、近いうち面揃えめんぞろがござりまする。当年は、この通り乱世でござりますから、どうなることとでございますか」

「なるほど壬生狂言とやら、国でも名前だけは聞いていました
が」

「なかなか風ふうが變つて、面白いものでござりますよ。お客様、
永逗留ながとまりゆうでございましたら、ぜひ見て行かします」

「それは話の種に見物がしておきたいものだ」

「それからな、あの島原という傾城町けいせいまちに一年一度の太夫道中が
ありますで、これがまた、大した見物みものでござります」

「なるほど、なるほど。花魁おいらんの道中は、わしも一度、江戸の吉

原で見ましたつけ。こちらのは、また変つた趣向でもありますかな」

「ナニ、同じようなもので。わしどもは江戸のは錦絵にしきえで見ましたが、あちらの方が何を申しても規模は大きいには大きいことでござりましょうが、道中の本家はやはりこの島原だそうで、見物おびたも夥しいことでござんすわい」

「なるほどな」

七兵衛はここで時間を少しよけいに費ついやしたいのだから、わざと氣長く構えて、親方と話をしているところへ、

「御免よ」

小間物こまものの荷を背負つた町人風の男が入つて来ました。

「爺さんとつ、今晚は」

荷物を手近へ卸して腰をかけた小間物屋は、腰から煙草入を

取り出しながら横目で七兵衛をジロリ。

七兵衛も、この小間物屋をひよいと見る、おたがいに目つきが変だと思えます。

「これは福造どの、今日は遅いことじゃな」

飯屋の親方は、心安そうな口の利き方。

「今日は、南部のお屋敷で品物を取^{とりひろ}拡げ、それがため暇^{ひま}をとりましたわい」

「はてな、南部のお屋敷へ小間物屋とは、ちとお門^{かど}が違いそうじゃがな」

「そのお門^{みずもの}違いのところだと思います、だから商売は水物^{みずもの}だよ」

「なるほど、あのお屋敷へ小間物が売れようとは、誰も思いがけない、浪人衆が小間物とは、坊^{かんざし}さんに簪^{かんざし}のようなものかねえ」

「あれでお前、表は厳めしいかそうなれど、裏からは、祇園、島原あたりから市兵衛駕籠が乗り込むというものさ」

「そうですね」

親方は感心したような顔をしながら銚子ちようしを持って来る。

「爺さん、やっぱり、鰻うなぎがいいね」

小間物屋は、グビリグビリとはじめて、親方との話が途切とぎれると面かおを七兵衛の方へ持つて来て、

「少し曇つてきたようですね」

「そうですね、晴れていましたがね」

七兵衛と小間物屋と話のきつかけが出来る。

「降るようなこともなからうが、いったい京は、江戸よりも天氣が変りつぽいようですね」

「そうですね、わしは京は、初めてでございました」

「失礼ながら関東はどちらで」

冒頭のつけに関東と言ひ出されたので、七兵衛は小間物屋の面を見ながら、

「武州でございます」

「そうでござんしょう、お言葉と言ひ、御様子と言ひ、武州もお江戸近く、次第によつたら甲州筋……どうでござんすな」

七兵衛は再び、この男の面を見直します。どうも眼つきが小間物屋にしては強過ぎる、関東の者か上方の者か、そのくらいの区別は誰にもつくが、江戸近く、甲州筋、そこまではちと念がある。

「よく当りました、八王子でござります。して、わしの生国しょうごくまで見抜きなさるお前さんは——」

「わしかね、わしも実は関東さ、常州水戸……ではない土浦生

れが流れ流れて、花の都で女子供を相手にこんな商売をしていますよ。失礼、一献ひとつ」

猪口ちよくを差出した手を見ると、竹刀しなだこ。七兵衛なにげなくそれを受けて、

「これはこれは」

小間物屋は七兵衛と一献いっこんを取交とりかわして出て行ってしまったあと

で、七兵衛はようやく飯を食いはじめながら、

「親方、その南部屋敷でえのは、いったい何だね」

「南部屋敷というのは、その壬生のお地藏様の前にある大きなお邸、いま浪人衆が集まっておいでなさるあれでございます」

「お地藏様の前……」

「黒い御門があるのでございます」

「なるほど」

七兵衛が目星めぼしをつけておいたのはその邸。

「で、その浪人衆というのは」

「近ごろ関東からお上りになりました新撰組と申しまして、つまり、このごろ諸国から上つて参る浪人をつかまえる浪人衆でございます」

「浪人をつかまえる浪人？」

「でございますから、肩ひじの、こんなに張つた、腕っ節の、こんなに太い、豪傑揃いでございます。わしどもも、その浪人衆ごひいきの御鼻肩ごひいきを受けているのでございますよ」

「で、その頭かしらは何という方ですかね」

「お頭は芹沢様に、近藤様」

「芹沢様に近藤様……お大名ですかね」

「なに、お大名でも旗本でもありません、どちらも浪人衆で」

「お名前は、何とおっしゃる」

「芹沢様の方が鴨」

「鴨ですって？ 妙なお名前ですね」

「全く妙なお名前ですよ」

「それでは、近藤様の方はあひ、とでも申しますかね」

「冗談じやうだんいっちゃいけません、そんなことが浪人衆の耳に入ると、

斬られちまいますぜ。近藤様の方は、だいぶ威勢のいいお名前だ、イサミ、勇とおっしゃいます」

「なるほど、イサミ……待て待て……近藤勇——お名前を聞いている。それで何かい、親方、その芹沢様と近藤様と、お二人が頭で、浪人衆がどのくらいおいでなさるかね」

「そうさね、どのくらいと言つて、わしらには確しかとわかりませ

んが、ちよつと見たところで七八十人、それにあちらこちらに出張所というものもあるようでござんすから、みんなではなかなかの人数でございましょう」

「お扶持ふちはどこから出るんだね」

「会津様から出るのでございます。そのほかにもだいぶ収入みいりが
おありなさるようで、茶屋や揚屋で、あのお仲間がお使いなさ
るのは大したもの、景気が素敵すてきによいのでございます」

「うむ——そうかね」

話はこので途切れて、どこかの寺院てらの鐘が鳴る。

「はてな」

「四ツでございます」

七兵衛は飯を食い終つて、代を払い、この店を出て壬生村の
闇やみに消える。

七兵衛は、地上を縦に走ると共に、横に走ることでもできたという。横に走るとは、塀なり垣根なりを足場として、地上とは身を平行にして或る距離を疾走する。また、逆に天地返し歩き方というのをやる。天地返しとは、天井へ足をつけて、頭を地上にぶらさげて歩く、壁を直角にかけ上る気合で天井を一步步して来るものであろう。

七兵衛は子供の頃から、屋の棟を歩くのが好きであつた。自分の家の屋の棟を歩き終ると、隣りの屋根へ飛び移つて、それからそれと宿の土を踏まずに歩いてゐた。長い竿で追いかける、その竿をくぐり抜けて、木の枝に飛びつき、塀の峰を走る。八方から竿でつきかけて、ついに足を払い得たものもなかったそうです。

月の宵、星の夜、真暗な闇の晩、飄々として七兵衛が、この屋

の棟遊びをやらかすことがある。秩父風ちちぶおろしの烈しい晩など、サーツと軒を払つて散る淅瀝せきれきの聲が止むと、乾き切つた杉の皮がサラサラと鳴る。ト、ト、トと、なずなを刻きむような音を屋根裏で聞くと、老人は眉をひそめて、

「七公、また悪戯いたずらをはじめやがつたな」

七兵衛は、地上の物をとることが上手じょうずなように、水の中の物をもよく探ることができた。

七兵衛が、多摩川の岸の岩の上に立つて、水の中を見ながら、それそこには鮎あゆがいる、山魚やまめがいる、かじかかがいる、はやはがいる、おこぜおがいる、ぎんぎよぎがいる。それそちへ行つた、それこちへ来たと独言ひとりごとを言っている。誰が見てもそんなものは一つも見えないのに、熟練な漁師が見てさえも見えないのに、岩の上からおりて来て、手を或る石の下へ入れると、その言つ

た通りの方角で、言つた通りの魚を手掴みにして来る。

永年の漁師がいろいろの道具を用い、不漁で困つてゐる時でも、七兵衛が行けば、きつと、びくをいっぱいにして帰る。七兵衛が魚をとるのではない、魚の方から七兵衛に来るのだと舌を捲いていたものです。七兵衛自身についてその秘訣を聞けば、こともなげに笑つて、

「みんなの人は、魚を逃げるように追っかけ廻してゐるだから、捉まらねえや。俺はこつやつて見てえて、魚が向うから来る鼻つぱしを掴むから逃がしつこなし」

一夜に四十里五十里を普通に歩いて、檜鉄砲（檜張りの笠を胸に当てて歩いてゐる）が下へは落ちなかつたといふことは、土地の人が誰も言う。

青梅の町の坂下というところに、近い頃まで「七兵衛地蔵」と

いうのがあつた、それは七兵衛が盗んで来た金を、夜な夜なそこへ埋めておいた。七兵衛が斬られて後、掘り出された。そのあとへ石のお地藏様を立てて「七兵衛地藏」と名づけられる。

この地藏は、最初は、あしこし足腰の病によく信心が利くと伝えられた、それから勝負事をするものにも信仰された。

夜、人知れず、この地藏様のお膝元ひざもとを掘って、相当の金を埋めておく、その金が三日たつてもとのままであつた時は、その月のうちに願ひ通りの大金が儲もうかる、なんぞと言ひ触らす者があつた。けれども埋めた人で、三日たつて元の金を見た者がない。それは附近の博徒ばくとがそんな流言をしておいて、埋めた金をそつと掘り出してしまふのだとわかつて、金を埋めるものはない。近ごろは町並を改正したために「七兵衛地藏」もほかへ移されたということです。

七兵衛の屋敷跡も、いま現に「七兵衛屋敷」と唱となえて青梅の裏宿うらじゆくに桑畑たになつて残つてゐるが、この「七兵衛屋敷」には、さまざまの祟たりがあると云い触ふらされてゐる。最初にそれを買つた人は、手入れをする早々、眩暈めまいがするとして引込んで、その晩に頓死した。二度目に安くそれを引受けた人は、ブラブラ病にかかつて、三月目ほどで死んでしまった。三度目には怖おそれて近づく人もなく放ほうつてあつたのを、剛情な男があつて、なにを、それは時のめぐり合せだ、物の祟りなんぞは、箱根から東にはねえ、なんぞと言つて、無銭た同様で引受けて、桑を植えた。その男には別に祟りも見えなかつた。世間も安心し、当人も自慢でゐると、或る年の冬、その畑に手入れをしているとき、桑の枯枝を結ゆわえてあつた藁わらがプツリと切れて、その枝が眼はを撥はねた。家へ帰つて来る間に、その眼がつぶれてしまった。

それから後、七兵衛屋敷はどうなつたか知らない。

壬生^{みぶ}の村のその晩はことに静かな晩でした。南部屋敷もさすがに人は寝静まる、勘定方^{かんじよう}平間重助^{かたひらまじゆうすけ}は、井上源三郎と碁^ごを打っているばかり。井上の方が少し強くて、平間は二目^{もく}まで追い落される。二人が碁をはじめると夜明しをするのが定例^{きまり}。お互いに天狗を言いながら局面を睨^{にら}んでいると、夜中にフイと行燈^{あんどん}の火が消えた。

「や、油が尽きたかな、火取虫めのいたずらか」

ようやく附木^{つけぎ}の火はついた。室には何の変つたこともなく、盤面の石もそのままに。行燈の油が尽きたのでも火取虫が来たのでもないようであつたが、碁に夢中な二人は燈火^{あかり}の消えた原因などを調べている余裕^{よゆう}はなく、再び燈火がつくとそのまま碁

を打ちつづける。夜明け方になつてこの碁が済むと、井上は帰り平間は寝る。

南部屋敷を七兵衛が覗^{ねら}つた晩は、この室で行燈の火が消えたほかにはなんらの異状もなくて済んだが、その翌朝、平間重助は、昨夜碁を打つた室に、ものすごい顔をして坐っている。

「平間氏」

障子を開いて身を現わしたのは、追分の松の下で棒を振つた仲裁の人、一ぜん飯屋で七兵衛を不審がらせた小間物屋、まこととは山崎讓。

「おお山崎君」

山崎は前夜の通り、無腰^{むこし}のまま地味^{じみ}な藍縞^{あいじま}の商人体^{てい}で平間の前へ無造作^{むぞうさ}に坐り、

「顔の色が悪いようだ」

「うむ、そうか」

「昨夜も、碁で夜明しをやったな」

「うむ」

平間の意気は沈んでいる。山崎が軽く話しかけるほど口が重くなる。

「どうした、おかしいぞ、今日は」

「山崎君、大変が出来しゅったいした」

「大変とは？」

平間は首を垂れた後、屹きつと山崎の面かおを見て、

「山崎君、拙者の頼みを聞いてくれ」

「何だ、改まって」

「一生の頼みじゃ」

「一生の頼み？ 真顔まがおで言うだけに気味が悪い」

平間は非常に苦しそうな息をついて、

「俺は腹を切る、友達甲斐ともだちがいに介錯かいしやくを頼む」

「ナニ、腹を切る？」

「うむ、腹を切る」

「よし、切るだけのことがあれば切れ、介錯もしてやろう、だがその仔細しさいがわからぬ、それを聞いた上で」

「まず、一通り聞いてくれ」

「聞くとも」

「昨夜、井上と碁を打った」

「うむ」

「夜明けまで打って、それから今のさきまで寝た」

「うむ」

「起きて見ると、金がない」

「金が——盗まれたか」

「碁を打つ前にかぞえて納めた小箆こだんすの中、三百両の不足じゃ」

「怪けしからん、詮議せんぎをしたか」

「さあ、その詮議がむつかしい。あれからこの室にいたは拙者と井上、これを騒ぎ出せば井上が承知すまい」

「うむ、もとより井上は盗みをするような男でない」

「で、ほかならぬ新撰組へ盗賊が入ったとあつては、一統の恥」

「そう言えば、そうじゃ」

「そこで、拙者一人が罪を被きる」

「うむ」

「島原通いの金に困つて、預かりの金を費つかい果した、その申しわけに腹を切る——隊中へはそのように披ひら露ろうする」

「なるほど——」

山崎は深く考え込んでしまった。

「待て、俺に少し考えがある」

この時に、山崎の頭にポーツと現われたのは、昨夜、一ぜん飯屋で飲み合つた関東の者という不思議な旅人。向うでも変だと思つたらしいが、こちらでも解げせないと思つて別れた——平間と山崎とは友人で、山崎は、常にさまざまに変装をして、諸国浪士の動静をさぐるに妙を得ている。

十一

その翌朝になつて、七兵衛はちよつとした羽織を引つかけて草履ぞうり穿はきで、小風呂敷を腋わきにかかえて、島原へやつて来ました。おおもんおおもん大門おおもんを入つて、道筋どうすじを左に曲ろうとすると、ふいと向うからやつ

て来て、おたがいかおに面を見合せたのは、昨夜、一ぜん飯屋で杯とりかわを取交した小間物屋です。

「気味の悪い奴が来たな」

七兵衛は、なんとなく気が置けて、面を外そらして通り過ぎ、木津屋の前に立つて見ると、つい先の路地にかの小間物屋は、さあらぬてい体でこちらを窺うかがっています。

よって七兵衛は、わざとそこを通り過すして、揚屋町の方へ曲ろうとすると、件くだんの小間物屋がソロソロと引返して、どうやら自分のあとをついて来る様子です。

七兵衛は、揚屋町をグルリと廻まわって、また道筋へ出る。と見れば右の小間物屋は、やつぱり後をついて来る。やむを得ず七兵衛は、用もありもしない下しもの町ちやうへ出て、ぶらりぶらりと軒並のきなみの掛行燈などを見て行く、一廻りして中堂寺町へ出て、後ろを

見ると小間物屋の姿は見えない。

占めた、七兵衛は喜んで、三たび道筋へ出ると煙草屋がある。煙草を買って行こうとその店へ面を突っ込んで見ると、その店先に腰をかけてプカリプカリ煙草をふかしているのが右の小間物屋です。七兵衛も、いよいよ気味が悪くなった。知らん面で、煙草を買って詰め替えて、店を出ると、右の小間物屋も、ソロソロとあとをつけます。

これはいけない、出直そう。

七兵衛は、また大門を引返して、丹波口から東をさして出ると、小間物屋もやって来る。

七兵衛は尻しりを端折はしよった。そうして、すつと、歩き出した。今まで廊くろわの中をブラリブラリと歩いていたのとは足並あしなみが違ちがう。

小間物屋は、急ぎ足で追いかけた。

七条通りまでは追いかけたが、そこでふっ、つり、見失った。小間物屋は齒齧^{はが}みをした。

引返した小間物屋は、また島原の廓^{くわ}の中へ身を現わします。

逃がしたのは残念だが、見当^{けんとう}のついたのは喜ばしい。

山崎讓は、何か独り合点^{ひとがてん}をしながら木津屋の暖簾^{のれん}の前へ来てみる。

ここの御雪太夫と近藤勇との仲は山崎もよく知っている。何か思いついて、

「こんにちは、御免下さいまし」

「あい」

嬉しそうに駆け出して来て、小間物屋の姿を見て、急に気落ちがしたように、

「何御用」

といったのはお松です。

「小間物屋でございます」

「小間物屋さん？ 少しお待ちなさい」

と言つて引込んだお松の後ろを山崎は見送っている。

お松は七兵衛の来るのを待ちに待っているけれども、七兵衛は影を見せない。

出口の柳まで、日に幾度いくたびも出て見た。家の前でする足音は、みな、七兵衛ではないかと思つて駈け出して見たけれども、あれも、これも、その人ではなかった。

今夜寝て起きれば、明日は三日目。明日こそお松は、ここをつれられて帰る約束の日……いろいろと想像してその夜は眠れずに待っている。

もう丑うしの刻こく、あんまり行く末すえ来こし方かたのことが思われて、七兵衛待遠ひきおびしきに眠れないので、お松は、かねて朋輩衆から聞いた引帯まじないの禁厭ひきおびのことを思い出した。それは、夜の丑うしの刻、屋根の上の火の見へ上つて、待つ人の家の方に向い平縫の帯を投げかけて、自分はその端を持つて、振向かずに火の見を下りて来る、その帯が物へひつかからず無事に自分の部屋まで来ることができれば、その待ち人は、きつと来るに違いないということ。

お松は、それをやつてみようかと心を決めて、そつと帯を出して、この部屋を忍んで、二階から火の見へ出てみました。

空は星が高く、葛野郡かどのごおりへ銀河が流れる。一二軒、長夜ちやうやの宴を

張つた揚屋の灯ひも見えるが、そのほかは静かな朱雀野すざくのの夜の色。

火の見に立つて、お松はその帯を投げかける何れいずかを見廻したけれども、七兵衛の宿というのを聞いておかなかつたから、

やはり出るにも入るにも大門の方。

別れてもまた会うという意味の引帶を、お松は朋輩から聞き
覚えたように、大門の方に向つて投げかけて、

あづまぢ
東路の道の果てなる常陸帶ひたちおび

かごとばかりも会はむとぞ思ふ

この歌を口の中で唱えて、立っていると、サーッと、風の吹
きつけたような物の音。中庭の木立が瓦に擦すれて鳴るかと思え
ば、猿のように屋根へ飛び上つた人影。

お松はハツと身が竦すくむ。その時、黒い人影は早や自分の前に
立って、

「声を立てるな」

「許してください」

「おお、お前は——お松ではないか、お松坊」

「まあ、お前はおじさん」

待ち焦^{こが}るる人はここに来た、けれどもあんまり突飛^{とつぴ}です。夜の丑の刻に屋根伝いにここへ来るとは、お松の眼には、これも夢以上。

「よい所で会った。お松、お前に会おうと思つて忍んで来たのだ」

「おじさん、今頃、どうしてこんなところへ」

「事情^{わけ}を話せば長くなる、なにしろ、わしが身は急に忙^{せわ}しくなつた」

「忙しいとは？」

「わしは人に追つかけられてる、怖い人^{こわ}がわしをつ^{ねら}けついてい^{ねら}る、それでお前のところへも来られなかつた、お前をつれて帰ることもできない、しばらくこのまま辛抱してくれ」

「おじさん、それでは、わたしを置いてどこぞへ」

「そうだ、これから直ぐに旅に出にやならねえ。お前をつれると、お前のために悪いから、当分このままで辛抱してくれ」

「まあ、どうしたものでしょう、おじさん何か悪いことをなすつたの」

「いや、あとでわかる、こうしている間も危ないのだ。そんならお松、ずいぶん身体を大事にしてな」

「わたしはどうしたらよいでしょう」

「ナニ、心配するな。親方にも太夫さんにもよろしく……だが、わしが来たとは決して誰にも言うではないぞ、お役人のようなのが来ても黙っていなさい。あの身受けの金は、持っているが今は出せない……」

通りで夜番の音がする。

「お松、よいか。ナニ、近いうちきつと来る」

こう言つて、七兵衛は屋根と屋根とを蝗いなせのように飛び越えて行つてしまいました。

十二

はじめて廓くわの大門を潜くぐつてみた兵馬の眼には、見る物、聞く物、みな異様の感じです。井村、溝部らは、揚々と行くにひきかえて、兵馬は、一足進むごとに息がつまりそうに思う。ついには堪こたえられなくなつて引返そうとしたが、我慢がまんして、そのあとをついて行くと角屋すみやへ入る。

「壬生じゃ、壬生から来た」

「ようお越しやす」

仲居は、直ぐに迎えに出たが、いい顔をしなかつた。

井村、溝部は刀を提げたまま、横柄おうへいに座敷へ通る。揚屋へは刀禁制であるが、壬生といえは刀のまま上る。井村は、大胡坐おおあぐらをかいて、酒を命じ、芸子げいこと太夫たゆうを呼びにやる。

命を奉じて仲居は出て行つたけれども、暫く姿を見せず、実は蔭でおぞけを振り、なるべくこの連中の座へは遠のいているわけです。

井村と溝部とは、盛んに呑む。兵馬は少し離れて、二人の様子を見ながら坐っていると、よその座敷で頻しきりに三味や歌の声、時々、調子はずれの詩吟まじが交る。

この時、井村はわざとらしく眉をひそめて、

「喧やかましい国侍くにぎむらいども、殺風景さつぷうけいな歌ばかり歌いおるわ……そもそも、

島原なげふしの投節、新町のまがき節、江戸つぎふしの継節、これを三都の三名

物という。今時は投節を面白く歌うて聞かせる芸子もなければ、

それを聞いて欣ぶ客もない。あんなガサツな流行唄や、突拍子

もない詩吟で、廓の風情も台なし、いよいよ世は末じゃて」

井村は柄がらにもない慷慨こうがいをして、ハハと笑い、

「さあ、これから拙者が、投節くずしというのを歌うて聞かせる——まあ、宇津木、そう固くならずに一杯飲め」

盃を兵馬の前につきつけた時、兵馬は、その盃を受けて井村の方に向き直り、

「井村、実は君に聞きたいことがある」

「何だ、改まつて」

「貴殿の手に傷がある、その傷はどこで受けた、それが聞きたい」

「ナニ、この傷？」

盃を出す手先を、ずっと見られてしまったから、もう隠しても遅い。

「これは、ちよつとした怪我。稽古槍を受け損じた」

「それはいつわりだ」

兵馬は、一膝つめよせる。

「いつわりとは何だ」

井村は眼に角立てて、刀をそろそろ引き寄せる。

「稽古槍の怪我ではあるまい、真劍きずの創きずであろう！」

「なに！ 真劍の創？」

「そうだ、井村、貴様は四条通りの菱屋ひしやという商人を知っているはずじゃ」

「菱屋？ それがどうした」

井村が刀をつかんで気色けしきばむので、溝部もそれに加勢をする

つもりで刀を取り上げて眼の色を変える。

兵馬も刀を取って床柱の方へ少しさがって、

「その菱屋へ、いつぞや三人の盗賊が入ったことがある、それについて君に聞きたいのだ、そう気色ばむな、穩かに話そうではないか」

「そんなことは知らん、俺は菱屋とやらの番頭でもなければ、盗賊の目付めつけでもないぞ」

「誰も、君が菱屋の番頭だとも、盗賊の目付だとも言いません、ただその盗賊の身許みもとを君に尋ねてみたまでじゃ」

「盗賊の身許を俺に？」

「そうだ、君が知らんというならば、その創に聞いてみたい、稽古槍の怪我か、真劍の創か、その創口に物を言わせてみれば、わかるはずである」

「怪^けしからんことを言う、余の儀とは違^{ちが}うぞ、盗賊呼ばわりは聞き捨てならんぞ」

井村は真赤^{まっか}になつて刀の柄^{つか}に手をかけると、兵馬はそれを制し、

「井村、抜く気か、それはよせ、君が抜けば拙者も抜く、溝部も抜き合わせるであらう、どのみち、どちらか怪我をする、ここの家を騒がせ、客人を驚かすに過ぎない、無益なことじゃ。まあ、刀は下に置き、そうして穏かに話そう」

「黙れ黙れ、盗賊呼ばわりをされては、俺は承知しても、刀が承知せん」

彼は溝部に眼くばせをする。兵馬は島田虎之助仕込^{じこ}みの腕である。隊の中で試合をしても、井村や溝部では齒が立たぬ。で、抜き合わせようとするのも半ば行きがかりの虚勢。兵馬は、つ

め寄せた二人を見つめながら、

「そう喧嘩腰けんかごしで出られては困る、君に覚えがなければ、何と言

われても腹の立つことはないではないか。拙者も君の言うたことにつき合うて用もないこの座敷へわざわざ出て来たのだから、

君も拙者の問いに答えてもらいたい、相見互あいみたがいじゃ」

かすりくつ

「粕理窟を言う場合でないぞ、二三言と盗賊呼ばわりをなさば、それこそ容赦ようしやはない。そのほかに聞きたいとは何だ」

「うむ、右の菱屋の——待て、盗賊の件ではない、菱屋太兵衛の女房お梅と申すものの行方ゆくえを、もしや君が知ってはおらんか」

「菱屋の女房がどうしたと？」

「行方知れずになった」

「それが、どうした」

「その行方を、もし君が知っておらんかと——」

「何を知るものか」

井村は、^も捌いで振り捨てるように首を振る。

「主人の太兵衛が申すには、取調べの筋があつて南部屋敷へ二度まで呼ばれて、二度目から今以て帰らんとする、不思議ではないか」

「それがどうしたというのだ、それをなんで拙者に問いたただす^{かど}廉がある」

井村は擬勢^{ぎせい}を張つて、兵馬の問いをいちいち^は匆ね返そうとしているらしいが、不安の念は言葉づかいの乱れゆくのでわかるのです。

「なら、君は、そのことについて一切知らんのか」

「無論じゃ」

「そう君が強情^{じやうじやう}を張るならば、こつちにも覚悟があるぞ」

「覚悟とは何だ」

「君のその手の傷に物を言わせる」

「ナニ！」

「その傷を^{あば}発いたら口があくはずじゃ、それがいやならば、ただ一言、^{ひとこと}太兵衛女房の^{ありか}在所を知らせてくれ、それだけでよい」

「知らんというに」

「あくまで強情を張るか」

「腕にかけてもだ」

「しからば、拙者は貴様を斬るぞ」

兵馬は刀を引き寄せる、井村、溝部は抜こうとする。

「溝部君」

兵馬は、溝部の方を見て、

「君は新参だから、このことには関係がない、そこに黙って見

ているがよい。しかし、強^しいて加勢をするつもりならば、拙者は、真先に君を斬るがどうだ」

兵馬は凜^{りん}として溝部に宣告を下す。溝部はその後、井村の紹介で入ったのだから、菱屋の一件には何の関係もない、そうして兵馬の剣道には怖れをなしている。行きがかり上、井村に加勢をしようとしてみたが、むぎむぎ命を投げ出すはあまりに張合いのない心地がする。

「うむ……」

煮^にえ切らない含み声で、氣を折られた様子が見える。

「よし、君はそこにいて、拙者と井村との勝負を見届けておいてくれ給え」

こう言われて、溝部はいよいよ行詰まったらしく、中立とも言わず、加勢とも言わず、柄^{つか}にかけた手の扱いに困った様子で

したが、

「いや、御両所、まあまあ待ち給え」

急に變つて留め役と出かけ、

「どちらにしても同志打ちはよくない、拙者に任せ給え。井村、君何か知っておるなら、宇津木君に言つてしまひ給え」

「知らんというに」

井村は、この時、そこにあつた盃洗はいせんを取るより早く、兵馬を
めがけて投げつけたのが、盃洗は床柱に当つてガツチと碎ける、
水は飛んで室内に雨をふらす。そうしておいて井村は、刀を抜
きかけて来るかと思うと一散いっさんに逃げ出してしまひました。

兵馬は、井村を取逃がし、組みついた溝部を抛ほうり出して、ひ
とり角屋を出て来た。その道々思うよう、

「自分は、新撰組を出よう。もとより自分の目的は、新撰組に加盟することではなかった、ただ、兄の仇を討たんがため、近藤、土方ら先輩の力を頼りに、たよつついその組の一人とはなつたが、どうも久しく足を留むべきところではないようだ」

十三

「与八ではないか」

「これは方丈様」

「このごろ、面を見せないからどうしたかと思つた」
かお

「このごろは仕事が忙せわしいもんだから、つい御無沙汰をしました」

「ちと、やつて来い、この間お前に運んでもらつた石をコツコ

ツやつているよ」

「お地蔵様をお彫りほなさると言つたあの石かい」

「そうだ、そうだ」

「方丈様、お前は絵もかけば字も書く、彫物ほりものなんぞもなさるだね」

「ああ、何でもやるよ、畑こめつづくりでも米搗きでも一人前は樂にやるよ」

「感心なものだね」

「生意気なことを言うな。それはそうと与八、遊びに來い、檀家だんかから貰つた牡丹餅ぼたんもちや饅頭まんじゅうがウンとあつて本尊様と俺とではとても食いきれねえ、お前に好きなほど食わしてやる」

「本当かい」

「嘘を言うものか、米の飯も食いたければ食わしてやる」

「済みましねえ、それじゃ、よばれに行くことにすべえ」

「江戸の土産話でも聞かせてくれ」
みやげばなし

「それから方丈様、いつか教えてもらった地藏様の歌、あのつづきを教えておくんなさいまし」

「和讃わさんかい、あれも教えてやるよ、どこまで覚えたか忘れやしまいね」

「忘れるものか、十にも足らぬみどり、子が、というところまでだ」

「そうか、お前の覚え込みの悪いのには閉口だが、覚え込むと忘れないだけが感心だ」

海蔵寺の東妙とうみょうという坊さんは、気の軽い、仕事のまめな方丈様で、与八とは大の仲よしです。

「与八、弾正殿の三年忌になるで、早いものだなあ」

「そうだなあ、大先生おおせんせいが死んでから、もう三年も経たつかなあ」

「わしも、碁敵ごがたきが一人減つて淋しいや、しかしまあ仕方がねえ。

時に、あの倅せがれ殿にも困つたものだて」

「若先生か」

「竜之助め、今どこにいることだか」

と言つて話をするうちに寺へ着く。

東妙和尚は、広い庭の真中に植えられた大きな枝垂桜しだれざくらの下の日当りのよいところに筵むしろを敷いてその上で、石の地藏をコツコツと刻きざみはじめる。

郁太郎いくたろうを背負おぶつたなりで与八は和尚の傍へ坐り込んで、

「出来たな、やあ、相好そうごうのいい地藏様だ」

「これから錫杖しやくじょうの頭と、六ろく大だいの環かんを刻めば、あとは開眼かいげんじや」

「方丈様、どこへこの地藏様をお立てなさるだね」

「うむ、これを立てるところか。それはな、ちつとばかり風の
変つたところへ立てるつもりだよ」

「どこだえ、この寺のお庭かえ、この桜の下あたりがいいな」
「いや、こんなところじゃない、わしは、ずっと前から思いつ
いていたのじゃ、ほれ、大菩薩峠の天辺^{てっぺん}へ持つて行つて立てる
つもりだ」

「大菩薩峠の天辺へ……」

「名からしてふさ、わしいと言うものじゃ、地藏菩薩大菩薩、な
んとよい思いつきだろう」

「そりや方丈様、いい思いつきだ」

「賛成かな。それで与八、出来上つてからここで開眼供養^{かいげんくよう}とい
うのをやって、それから大菩薩峠の頂^{あんち}へ安置する」

「なるほど」

与八はしきりに感心をして、

「その時は、方丈様、俺がこのお地蔵様を峠の天辺まで背負^{しよ}つて行つてやるべえ」

「そいつは面白い、この石も、お前に担^{かつ}いで来てもらつたのだから、御尊体も、お前に持つて行つてもらふことにしよう」

「有難え、有難え、そうすると、俺も功德^{くどく}になる」

「結構結構、南無延^{なむえん}命^{めい}地蔵大菩薩、おん、かかか、びさんまえい、そわか——」

「方丈様」

「何だ」

「あの地蔵様の歌のつづきを教えてもらいてえ」

「和讃か」

「西院河原地蔵和讃、空也上人御作とはじめて――」
さいのかわらじぞうわさん　くうやしようにんおんさく

これはこの世のことならず、

死出しでの山路やまぢの裾野すそのなる、

さいの河原の物語、

聞くにつけても哀れなり、

二つや三つや四つ五つ、

十にも足らぬみどり子が、

ここまで覚えたからその次を」

「よしよし、わしが唱となえるから、あとをつけろや」

東妙和尚は石鑿いしのみを地蔵の御衣のひだに入れて直しながら、

さいの河原に集まりて、

父こひし、母こひし、

こひし、こひしと泣く声は、

与八はあとをつづけて、

さいの河原に集まりて、

父こひし、母こひし、

こひし、こひしと泣く声は、

和尚は先へ進んで、

この世の声とはことかはり、

悲しさほねみ骨身をとほ透すなり、

「方丈様、なんだか悲しくなつちまつた」

与八の眼には涙がいつぱいです。

「有難い地蔵様のお慈悲じゃ、涙もこぼれようわい。我々凡夫ぼんぷの涙は、しじみが蜆貝に入れた水ほどのものじゃ、地蔵様の大慈大悲は大海の水よりも、まだまだ廣大。それ我々凡夫は、ちよつとしたことにも悲しいの、嬉しいの、すぐ安つぽい涙じゃが、この

無仏世界の衆生の罪障つみをござんになる大菩薩の御涙というものは、どのくらいのものか測り知れたものでない。南無延命地藏大菩薩、おん、かかか、びさんまえい、そわか」

「そういえば、そうだなあ。俺わしらは一人の子供の身の上でも心配すると泣き切れねえことがある、お地藏様がこの世間をござんになったら、さぞ辛いことだんべえ」

「そうだ、そうだ、それから次を唱えて聞かすぞ——」

かのみどり子の所作しよさとして、

河原の石を取り集め、

これにて回向ゑかうの塔を組む、

一重ちゅう、組んでは父のため、

二重、組んでは母のため、

三重、組んでは古里ふるさとの、

兄弟わが身と回向して、

昼はひとりで遊べども、

日も入相いりあひのその頃は、

地獄の鬼が現はれて、

やれ汝等は何をする、

娑婆しゃばに残りし父母は、

追善ついぜん作善さぜんのつとめなく、

ただ明け暮れの嘆きには、

むごや悲しや不憫ふびんやと、

親のなげきは汝等が、

苦患くげんを受くる種となる、

われを恨むることなかれと、

くろがねの棒をさしのべて、

積みたる塔を押しくづす、

「どうじゃ与八、怖ろしいことではないか。頑がんぜ是ぜない子供がやつと積み上げた小石の塔を、鉄の棒を持った鬼が出て来て、みんな突きくずすのじゃ。なあ、これを他人事ひとごとと思つてはいけなぞ、追善作善のつとめというをせぬ者には、みんな鬼が出て来るじゃ、何をしてもしな成り立たないで、みんな鬼が不出るじゃ。よいか、他人事と思つてはいけなぞ」

「あに他人事と思うべえ、いちいち腹の底まで沁しみ込むだ、有難え、有難え」

「さあ、その次だ——」

その時、能化のうげの地藏尊、

ゆるぎ出でさせ給ひつつ、

汝等いのち短くて、

冥途めいどの旅に來きたるなり、

娑婆と冥途は程遠し、

われを冥途の父母と、

思あけくうて明暮れ頼めよと、

幼き者を御ころもの、

もすその中にかき入れて、

哀れみ給ふぞ有難き、

いまだ歩まぬみどり子を、

錫杖の柄にとりつかせ、

忍辱慈悲にんにくじひのみはだへに、

抱きかかへ撫でさすり、

哀れみ給ふぞ有難き——

南無延命地藏大菩薩、おん、かかか、びさんまえい、そわか」

「郁坊、よく聞いておけ——他人事では無え」
与八はホロホロと涙をこぼして、背の郁太郎を揺り上げる。

十四

今日は島原の角屋で大懇親会。

それは新撰組と大阪の大相撲とが大喧嘩おおげんかをしたその仲直り。

小野川秀五郎の口の利き方がよかつたので、喧嘩の仲直りができた上に、新撰組が相撲の鼻祖ひいきとなり、その力で、近々壬生寺みぶでらに花々しい興行を催すという。

近藤勇と芹沢鴨とが正座にいとところへ、小野川秀五郎は盃をもらいに出かけて気焰きえんを吐いている。

この時、小野川はもういい年であつたが、気負きおいの面白い男

でよく飲む。

「小野川、貴様も大分いけるようだが、年をとったな」

近藤勇が言う。

「どう致して、相撲に年をとるというはごわせぬ」

「負惜しみを申すな、争われぬは額の皺ひたいしわと鬢びんの白髪しらが。どうだ、一

番おれと腕押しをやろうか」

「いやはや、近藤先生、剣にかけたら先生が無敵、力づくではこの秀五郎が前に子供でがす」

小野川はこう言いながら、前にあつた小皿をとつてバリバリと噛み砕かくだき、

「歯の力だけが、こんなもんじゃ」

「愉快愉快、も一つ飲め」

近藤勇は、小野川の老いて稚気ちきある振舞ふるまいを喜んで話している

と、芹沢は、さつきから席を周旋して廻るお松の姿に眼をつけ
て、

「いま銚子ちようしを持って立つた、あの可愛い女、あれはどこの子だ。
ナニ、木津屋の養女だと。そうか、ゆくゆくは太夫にでもなる
か。拙者が鼯鼠ひいきしてやるからここへ来いと言え」

お松は今日の忙しさに加勢に頼まれて来ていたのを、

「お松さん、あの正面の怖い面こわしたお客様が、お前に御用だと
申しておりますが」

囁ささやかれて、お松は、

「ただいま参りまする」

この時、歌うもの踊るもの、相撲を相手に腕相撲をするもの、
芸子げいこへかじりついて騒がすもの。

「おい、庭で一丁いっちょよう」

新撰組の沖田総司そうじは、力自慢が嵩こじて相撲を一人ひっぱり出し、庭へ下りて四股しこを踏む。

「沖田川、しつかり！」

席は混乱して、みな縁先へ集まる。

芹沢鴨は、それには眼もくれず、

「お前は美しい女よじゃ、ここへ坐れ」

目を細くして、前へ来たお松の面を見る。

「御免あそばせ」

お松は盃をいただいて下に置くと、

「わしは芹沢じゃ、たびたびここへ遊びに来るが、お前の姿を見るは初めてだ、名は何と申す」

「松と申します」

「年はいくつだ」

「当ててごらんあそばせ」

「十六から八までの間、違いなかう」

「そんなことでございましょう」

「生れはどこじゃ」

「西国でござります」

「西国は」

「巡礼の札所ふだしよでございます」

「なに？」

お松も人に慣れて、このごろではあまり物に怖おじなくなつた。

そこへ、

「芹沢先生、お流れを頂戴致しとうござんす」

罷まり出たのは小野川秀五郎。

「やあ、小野川か、それ」

盃を抛ほうつてやった。

「時に芹沢先生」

小野川は芹沢の前へ膝をすすめて、

「承なづかわれば先生には水戸の御出生。水戸と聞いて、この秀五郎もお懐なづかしゅうござんすわい」

「貴様も水戸生れか」

「生れは違いますが、畏おそれながら烈公様に、一方ならぬ御ご臍ひいき肩かたを受けておりまするからに、水戸と承われば、どうやら御お主しゅ筋すじのような気が致しまするで」

「なるほど、貴様は烈公の御機嫌伺いに出かけるそうな、ちつとは儲もつかるか」

「儲かると言わんすのは……」

小野川はムツとする。

「うむ、水戸はいつたい吝けちなところじゃ、家中かちゆうを廻り歩いても
トンと祝儀しゅうぎが出まい」

「芹沢先生、ちつと話が違います」

「違うとは何だ」

「世間には左様な真似まねをして歩くものがないとは限らん、わし
は、それが嫌いきらじや」

「そうか、貴様は嫌いか」

「水戸様からいただいたお盃には、お手ずから草体そうたいで『水』と
書いてござんすのじや」

「それがどうした」

「それが、秀五郎忠義の看板でござります」

「うむ、豪えらい奴だな、貴様は」

芹沢は皮肉な言葉で、意地悪く小野川をひやかそうとする。

このたびの喧嘩の落ちは近藤に取られて、それからメツキリ芹沢の人望が落ちた。それが癩しやくにさわつて芹沢は、今宵こよいも小野川に突つかかつてみる、小野川も虫がいず無言で白しろけていた時、

「小野川、ちとこつちへ来い」
二三枚離れていた土方歳三が小野川を呼びかける。

お松は、座敷の人混ひとごみに上氣して、ひとり誰もいない室へ来て、ホツと息をついて、熱ほてる頬を押えています。と、次の間で人のささやく声、

「よいか」

「うむ」

念を押した声と、頷うなずいた声。

「近藤の馴染なじみという女は誰だ」

誰とも知れぬ人の声。

「御雪、みゆき木津屋の御雪というのだ」

「ナニ、木津屋の御雪……」

お松は、聞くともしに耳に入つた名は自分の姉分になる御雪太夫のことですから、思わず身が固くなる。しかもその話の主の一人は、さいぜん自分と呼ばひつけた芹沢鴨のようです。

「それから、吉田氏」

というのは、やつぱり芹沢鴨に相違ない。お松は次の間の私々話ひそひそばなしをいやでも立聞きしなければ済まないことになつたので、息を殺していると芹沢は、

「いよいよ近藤を片づけたら、次には君に引出物がある」
ひきでももの

「引出物とは何だ」

「兵馬の首だ、宇津木兵馬の首を拙者が手で取つてやる」

「兵馬——なんの」

芹沢でない一人は、冷やかに言い切った。

「君は兵馬を小倅こせがれと侮あなどっているが、なかなかそうでないぞ、あれほどに腕の立つ奴は、新撰組にも幾人となひ」

「……………」

「始終、君をつけねらつてゐる、兵馬一人ある以上は、君の身は危ない」

「今、どこにゐる」

「つい、この近いところどつにゐる」

広間の方で哄どつと喊声かんせいが起る。ここで二人の私話ささやきは紛まぎれて聞えなかつたが、暫くして、

「よし、やがて合図をする、相手が相手だからずいぶん抜からず」

芹沢はこう言つて席を立とうとするらしい。

「念には及ばぬ」

やがて、刀を提げる音、サワサワと鳴る袴はかまの音。

一旦立ち上つた芹沢は、

「今いう御雪というのは、素敵な美人じゃ、近藤を片づけたら、君に取持とう、君も女房が死んで淋しかろうからな」

怖ろしい人々である。どうやら近藤勇を殺し、兵馬を殺し、近藤の思い者、御雪太夫を横取りする……お松はこの上もない恐ろしい相談を聞いてしまった。

幸か不幸か、芹沢はお松が潜ひそんでいた方の襖ふすまを颯さつとあける。

「誰だ、そこにいるのは！」

「はい、私でござります」

お松は逃げ場を失つてしまった。

「何をしている」

「あの、つい気分が悪いので、ここで息を休めておりました」

芹沢は、近寄って、

「お松ではないか」

「はい」

「うむ」

芹沢は思案して、ひざまづ跪いているお松の手をとって、

「拙者と一緒に来い」

「まだ、あの、お座敷の方に用事がありますから」

「用事があつてもよい、一緒に来い」

お松は、手をとられて、はが羽搔いじ締めのような形。芹沢は左の手

に刀、右の小脇に軽々とお松を抱えて、

「聞いたな」

「いえ、なんにも」

「聞いてもよいわ、お前ならば聞かれても大事ない」

「どうぞ、御免あそばして」

「怖いことはない」

誰であつたか、隣にいた人はこの場合にも口を一つ挿まなかつた。
はさ

芹沢は、も一つ次の間へお松をつれて来て、

「お松、拙者は、お前をひいき鼻肩にする」

「有難う存じます」

「お前は木津屋の娘分だと言うたな」

「はい、左様でございます」

「俺のところへ遊びに來い。お前は幾つというたかな」

「あれ、どうぞお放し下さい。お座敷へ出ませぬと叱られます」

る」

「叱られたら、この芹沢が謝罪あやまつてやる。どうも熱い、酒のせいで頬が熱い」

芹沢は、わぎとお松の面かおに近く酒にほて、つた頬を突き出して、

「いつ、太夫のひろめをする、その時は一肌ぬいひとはだでやるぞ」

「有難うございます、お座敷へ出ませぬと……」

「いや、よろしい」

「いけませぬ、どうぞ、お放し下さい」

「わからぬ奴じゃ、拙者が承知と申すに」

「御冗談ごじやうだんをなさいますな」

「冗談ではない」

「お放し下さい」

お松は、もう一生懸命です。力を極めて芹沢を突き飛ばして

みたところで知れたもの、芹沢の腕は、大蛇おろちが兎を締めたようなもの。

「あ、助けて下さい」

お松は絶え入るばかり叫ぶ。芹沢はちよつと手をゆるめ、
「これ騒ぐな、何も怖いことはないではないか。泣くのか。何も泣くことはなからう、明日の日、太夫の位を張ろうとするほどのお前ではないか」

「芹沢様とやら、お前は、新撰組の隊長でありながら、わたしのような弱いものを苛いじめてどうなさいます、どうぞお許し下さいませ」

お松は哀れみを訴えて虎口をのがれようと試みる。

「なんの、お前をいじめるものか、ひいき蟲屑うしろだてにしようというのじゃ、な、これから新撰組の隊長が、お前の後楯うしろだてになろうというので

はないか」

「芹沢氏、何をしておる」

この時はじめて、室一重ひとえにいた誰とも知らぬ一人が声をかけた。

「うむ、いや、取調べている」

芹沢が、お松を見つけて苛めいじつけているのを、さいぜんから見もし聞きもししていながら、今になつてただ一語ひとこと、

「何をしておる」

咎とがめた声は怖ろしく沈んだ男の声。芹沢も多少きまりが悪く、

「取調べている」

とごまかして、それでもお松を放そうとはしない。

「取調べが済んだら、早う御処分をなさい、大事の前の小事かはかりごと
ら謀はかりごとが破れるわ」

「それもそうじゃ」

芹沢はしぶしぶと身を起こし、

「とは言え、この女、油断がならぬ」

「お斬り捨てなさい」

こともなげに隣室となりから走る一語、お松の骨を刺す冷たさがある。

「斬り捨てるほどの代物しろものでもない」

「然らば拙者が預かろう、貴殿は早く同志を沙汰さたして、ずいぶん抜かりのないように。なんにしても相手が相手だ」

「では、この女、しばし君に預ける」

「いかにも、預かり申す」

「大事に扱え、これはソノ、御雪が妹分じゃ、無茶なことをしてはならんぞ」

「ともかくも拙者が、よきように預かる」

「そうか」

芹沢は残り惜しそうな面かおをして、お松を隣室ほうに抛り込んで、自分はこの場ばを外はずして行く。

「これ女」

お松を預かった人は沈んだ声。

「はい」

「おまえは誰かに頼まれて、この隣室となりへ来たか」

「いいえ、誰にも頼まれたのではござんせぬ、席の騒がしいのに上気して、気を休めようと思ひまして」

「何はしかれ、我々が密談の席へ近寄ったが不運じゃ、わしが赦ゆるすまで、ここにおれ」

「はい、決して一言ひとことも、あなた様のお話を伺ったわけではあり

ませぬ故、どうぞお赦し下さいませ」

「いかん、もしお前が声を立てたり、逃げ出そうとしたりすれば、不憫ふびんながらお前を斬る。拙者がこの席を動くまでじつとしておれば、無事にゆるしてやる」

「はい」

この、お松を預かった人というのは、机竜之助です。お松のためにも兵馬のためにも仇かたきたる机竜之助が、芹沢鴨一派の頼みで、これから近藤勇一派を暗殺しようと、その合図が整うて、ここに来合わせたもの。机竜之助は、薄暗あんどんい行燈の火影ほかげを斜めに蒼白あおしろい面に浴びて、小肴こざかなを前にチビリチビリと酒を飲んでいます。

お松を前に置いて、縛るでもなければ嚇おどすでもなく、さりとて冗談じょうだんを一つ言うでもなく、竜之助はチビリチビリと酒を飲ん

でいる。時々酒の手を休めては、眼をつぶつてじつと物を考え込む。

「うーむ」

考え込むと、深い吐息といきで、手に持つ猪口ちよくがフラフラと傾いて酒がこぼれそうになる。気がついてグツと呑んで、余滴よてきをたらたらと水の上に落して、それを見るときもなく見つめて無言。

「動けば斬る」

このものすごい武士の唱えた呪文じゆもんで、お松は金縛りかなしばりにされてしまった。酌しゃくをしろとも言わず、また一杯ついで静かに口のところへ持つて行き、唇へ当てようとしたが、急に思い返したように猪口を下に置いて、

「うーむ」

と吐息。

右の手をあげて、頭を押えてうつむく。しばらくして、また屹^{きつ}と頭を上げて、猪口をとり、お松の方をボンヤリと見た。

「お前は木津屋の娘じゃそうな」

「はい」

竜之助は一口飲むと急に咳^{せき}をして酒を吐き出し、あわてて猪口を置いて、懷紙^{かいし}で四方^{あたり}を拭き廻す。

「あの、お武家様」

お松は一生懸命で口を切る。

「何だ」

「何も存じませぬのでございますから、どうか、お赦^{ゆる}しあそばして」

「いかん」

「主人も心配しておりましょうし、何も知らないのでございま

すから」

竜之助は、軽く首を左右に振りて答えず。

さしも騒がしかった今宵の宴会も、存外早く片がついて、その大半は帰った様子。広間の方ではまだ相当の人声であるが、その半分の、人なき間毎の寂しさは急に増した。

お松は、急になんだか身の毛が立つように覺えた。というのは、さいぜん芹沢につかまってからの怖ろしさと、黙って酒を飲んでゐるこの怪しい武士の前にいる怖ろしさとは、怖ろしさが違う。

「この人は幽霊ではあるまいか」

とさえ思われたくらいで、席が静かになるにつれて行燈が薄暗くなる、その影で吐息をつきながら、一口飲んで置き、唇まで持つて行つては止め、首を垂れてみては、また屹きつと匆はね返し、

座の一隅に向つて眼を据^すえるかと思えば、トロリとしてお松の面を見る。

その怖ろしさは、総^{そうみ}身に水をかけられるようで、ゾクゾクしてたまらないくらいです。

「そ、そこへ来たのは誰だ」

竜之助は、お松の坐っている後ろの方へ眼をつけて突然こう言い出した。

「え、誰も……どなたも来ておいではございませぬ」

お松は、身を捻^ねじむけて、後ろを顧みながら答える。

「そうか、それでよい」

竜之助はぐつたりと首を垂れて、

「うーむ」

という吐息。

「あれ、幽霊が——」

お松は何に驚いたか——

「ナニ、幽霊？」

竜之助は勃然と、垂れた首ぼつねんを上げる。

「ああ、怖かった、今ここへ——」

「ナニ、今ここへ何が来た」

「女の姿が——」

「女の姿が？」

竜之助は、左の手を差置いた刀にかけて、室の中を見廻す。

切れの長い目は颯さっと冴え返る。

お松は知らず知らず竜之助の膝に身を寄せていた。

「ハハハ」

竜之助の笑って打消す声は、かえつてものすさまじさを加え

る。

「なにをばかげた」

お松は、竜之助の傍を離れ得ない。竜之助の傍を離れられないくらいに怖ろしいものを見た。

「あの、お武家様、昔からこの部屋には幽霊が出るように申し伝えてあります」

「この部屋に幽霊が？」

改めて竜之助がこの部屋を見廻すと、「御簾の間」であつた。

昔、九重ここのえという全盛の太夫さんが、ここで自害をなされまし

た

「ふーむ」

「その太夫さんは、やんごとなきお方の落し胤おとだね、何の仔細しさいがあつてか、わたしはよく存じませねど、お身みなりを平素ふだんよりはいつ

そう華美^{はで}やかにお作りなされ、香を焚^たいて歌をお書きになつて、
懐剣でここを……」

お松は、自分で自分の咽喉^{のど}を指さして戦慄する。

「ふゝむ、そんな由緒^{いわれ}のある部屋か」

「でございますから、怖ろしゅうございます」

「怖ろしいことはない」

竜之助は、また首垂^{うなだ}れて酒を飲み出す。怖ろしさから傍へ寄つたお松の化粧^{けしょう}の香りが紛^{ごん}としてその酒の中に散る。竜之助は我知らず面を上げると、ややあちら向きになつていたお松の、首筋から頬へかけて肉附よく真白なのに、血の色と紅^{べに}の色とが通^{かよ}つて、それに髪の毛がほつれて軽く揺^ゆいでいる。

自分の膝には、お松の手が置かれてある——竜之助はそれを見る。涸^かれ果てた泉に甘露^{かんろ}が湧く。竜之助も前にはお浜をこう

して見て、心を戦かしたこともあつた。おのの

「おお怖い」

お松は、はじめて自分の所在を知った、その身はあまりに近く、その手が竜之助の膝の上にまであつたのに気がついて、きまりが悪い——あわてて身を縮めた時に、竜之助が燃えるような眼をして、自分を見据えていたのでか、つとしました。

「お前はいくつになる」

「いいえ」

お松は、つかぬ返事をする。

「静かになつたな」

「あれ、また何か！」

お松は、床の間の方を見る。

「ナニ！」

竜之助は猪口ちよくを取落した。

お松がいま言うた九重なきたまの亡魂でなければ、竜之助の身の中か

ら湧あつきいて出る悪気。

この「御簾の間」は、時としてどこからともなく風が吹いて来る。

その風がしゅうしゅうとして梁はりを渡り、或るところまで来てハタと止まると、いかにも悲しい歎すすりなき歎なきの聲が続く。

誰も、そんなものを聞いたものもないくせに、そんな噂をする者はある、ホントにそれを聞いた人は、命を取られるのだという。お松は今それを聞いた——と自分ではそう信じてしまつたらしいのです。

竜之助は手おののが戦たたかいて猪口を取落した。

その取落した猪口を拾い取ると、何と思つたか、力を極めて、

それを室の巽たつみの柱の方向をめがけて発止はつしと投げつける。猪口はガッチと碎けて夜の嵐に鳴滝なるたきのしぶきが散るようです。

と見れば、竜之助の眼の色が変っている。

竜之助の眼の色は、真珠を水に沈めたような色です。水が澄む時は冴さえる、水が濁る時は曇る。冴さえる時も曇る時も共に沈んだ光があつた。今はその光が浮いて来た。

猪口の碎けて飛んだ室の中を、ここと目当のなく見廻した時の眼は、かの音無しの構えにとつて意地悪く相手を見据えた時のような落着きが三なく、不安と、そうして散漫とがようやく行き渡る。

「うむ——」

額を押えて力なく折れた。

「どうかなさいましたか」

「頭が痛い」

「それは困りました」

「眼が廻る」

「お薬を差上げましょう」

お松はふいと立った。

「いや、それには及ばん」

「それでは、お冷水ひやを」

「何も要いらん」

竜之助は額を押えて薬も水も謝絶ことわる。しかしながらよほどの

苦しみには、うつむいた面かおが下るばかりです。

お松は、この時ふいと気がついた、逃まげるならこの間である

「待て！」

うつむいた面がバネのように上ると、竜之助は刀を取つていた。

「逃げるか！」

「いいえ」

「そこへ坐れ」

その眼で睨められた凄さ^{すご}。この人の身の廻りには、魔物のように物を引く力がある。夢で怖いもの^{こわ}に追われたように、逃げようとすれば足がすくむ。

「うーむ」

竜之助は、また額を押えて唸る^{うな}、そのうなり声を聞くと地獄の底へ引き込まれそうです。

「ああ——」

竜之助は、そろそろと面を上げて、

「これこれ女」

思いのほか静かな声で、

「妙な氣持になった、お前に少し聞いてもらいたいことがあるがな」

「何でございましょう」

「いや、拙者も国を出てから長いことになるが、思い出せば子供が一人ある」

なんという話頭はなしの変り方であろう。しかしその言葉には、なんととも言われぬ痛々しさがあります。

「お子様がおありなさる……」

「郁太郎と名をつけて男の児じゃ」

「はい」

「もし縁があつて、お前がその男の児にめぐり会うような折も

あらば、剣術をやるなと父が遺言ゆいごんした、こう申し伝えてもらいたい」

「そのお子様に、あなた様が御遺言……」

「そうだ、生前の遺言じゃ。拙者の家は代々剣術の家であつたが、もう剣術をやめろと言つてもらいたいのじゃ」

「それは、どういうわけでござんしょう」

「別にわけではない」

この不思議な人の言うこともすることも、いちいち、この世の人ではないようです。

「承知致しました。そのお子様は、お母さんと御一緒に今お国においてなさるのでございますか」

「いや、そうでない、母という奴、拙者には女房じゃ、それはいない」

「お母さんも、おなくなりなさいましたので？」

「うむ——俺が殺した」

「まあ、あなた様が手にかけて！」

「手にかけて殺した」

「なんという惨いこと……」

「芝の増上寺の松原で、松の樹へ縛っておいて、この刀で胸を突き透した」

武蔵太郎を取り上げた机竜之助は、やにわに立ち上って、眼が吊り上る。

「あれ——危ない」

立ち上った竜之助は、よろよろと足がよろめくのを踏み締め、颯と刀の鞘を外した。

「誰か来て下さい！」

お松は、この時、はじめて絶叫することができた。

「騒ぐな！」

武蔵太郎は閃々^{せんせん}として、秋の水を潜る魚鱗^{ぎよりん}のようにひらめく。

「あれ危ない、誰か来て下さい」

「騒ぐな！」

竜之助は、刀を横より斜めに振って、切先が襖^{ふすま}へ触れると、ハラハラ御簾^{みす}の形はくずれる。

「お武家様が気が狂いなされた！」

竜之助が、真に人を斬るつもりで刀を抜いたのならば、最初の一閃^{いつせん}でお松の命はないはずであります——逃げ廻るお松の身に刃は触れないで、あらぬ方^{かた}を見廻しつつ振りまわす切先は、襖、畳、柱のきらいなく当り散らして竜之助の足もととはよろよろ——まさしく気が狂ったものに違いない。

「やあ！」

薄^{うす}ボンヤリと光っていた罪のない行燈^{あんどん}は、真向^{まっこう}から斬りつけられ、燈火はメラメラと紙を嘗^なめる。竜之助は、行燈が倒れて、火皿の燈心が紙に燃えうつるのを見て、立ち止まって笑う。

お松は、この間に逃げ出した。多くの人はお松の叫び声でバラとここへかけつける。

竜之助は、襖にうつろうとする火の色を見て笑っています。

十五

その晩、芹沢鴨は早く宴会の席を出て壬生の屋敷に帰り、愛妾^{あいしやう}のお梅を呼び寄せる。お梅というのは、さきごろ町家の女房を強奪して来たそれです。

芹沢と一緒に帰ったのは、その腹心平間重助と平山五郎。

芹沢が早く席を切り上げて帰ったのも珍らしいが、今宵は非常に機嫌なしみがよくて、お梅を相手に飲み直していると、平間重助はその馴染なしみなる輪違わちがいの糸里という遊女、平山五郎は桔梗屋きぎょうやの小栄というのをつれ込んで、この三組の男女は、誰憚らぬ酒興中、芹沢は得意げに言うことには、

「いよいよ拙者の天下である、明日になって見ろ、わかることがある」

こう言つて、芹沢はお梅に酌をさせて頻しきりに飲んだ。

芹沢はお梅を抱いて快く眠った。屏風びょうぶを立て廻めぐして同じ広間の中へ、平間と糸里、平山と小栄の二組も、床を展のべさせて夢に入る。芹沢が欣々きんきんとしていたのは近藤を謀はかり得たと思つたからです。今宵の宴会の終りに近藤勇は、その馴染なる木津屋の御

雪を呼ぶか、御雪のところへ行くか、然らずばおそ晩くこの屋敷へ
帰る。その隙すきを見て多勢やみうで暗討てくぱりち。人の手配てくぱりに抜かりなく、こ
とにその手利てききの一人として机竜之助を頼んでおいた。明日に
なれば、首のない近藤勇の死骸を、島原界隈かいわいで見つけることが
できる。そして新撰組の実権を自分の一手に握る、これを根拠
としてやがて一国一城の望みを遂げようという。

ところが、それよりズット前に、近藤勇は土方歳三と沖田総
司と藤堂平助とをつれて、駕籠にも何にも乗らずコッソリ裏の
方からこの屋敷へ帰って来て、いるかいなかかわらないくら
いの静かさでおのおの近藤の居間に集まっていたのを芹沢らは
ちつとも知らなかった。芹沢らがいいいよ寝込んでしまったと
見定めた時に、近藤勇だけは平服、土方と沖田と藤堂の三人は
用意くろしやうぞくの黒装束。

三人は長い刀を抜きつれて、芹沢らが寝ている間へ向って行く、近藤勇はそのあとから、刀を提げて凄^こい目を光らせながらついて行く。

寝ていた襖をあけたけれども知らない、酔ったまぎれに夜具を撥^はねのけ女も男もだらしない寝すがた。土方はツカツカと進んでその寝すがたを調べてみた。

「ふむ、これが平山、女は小栄だな」

「平間に糸里か、不憫^{ふびん}ながらこれも相伴^{しょうばん}。さて大將は」

やや高い声で言ったけれども、まだ覚めはしない。屏風^{びょうぶ}の中をのぞいて見ると、お梅は寝衣の肌もあらわに、芹沢は軀^{いびき}が高^{たか}い。

土方はニツと笑って、次の間の入口に立っていた近藤勇に合図する。この時、小栄と寝ていた平山五郎がふいと眼をさます。

眼をさまして、さすがに平山もその様子の変なのに驚いた。

枕を上げようとする途端を藤堂平助がただ一太刀。

平山の首は宙天ちゆうてんに飛んで、一緒に寝ていた小栄の面かおに血さつが颯

とかかる。小栄は夢を破られてキヤーと叫ぶ。

この時早く、芹沢とお梅との寝ていたところの屏風は諸もろに押し倒されて、三人の黒装束はそれにのしかかると見れば、屏風の上から蜂の巣のように、続けざまに下なる芹沢めがけて柄つかも拳こぶしも通れ通れと突き立てる。

「わーッ、何者だ、無礼者め！」

芹沢鴨は絶叫しつつ、片手を枕元の刀にかけながら屏風を刎はね返そうとする。

「助けて下さい——」

お梅は苦叫くきようもんきよう悶叫もんきよう。

快樂けらくの夢を結んだ床は血の地獄と変る。芹沢は股、腕、腹に数力所の深傷ふかでを負うたがそれでも屈しなかつた。力を極めてとうとう屏風を刎ね返して枕元の刀を抜いて立つた。

芹沢といえども剽悍ひょうかんむひ無比なる新撰組の頭かしらとまで立てられた男である、まして手負猪ておいしの荒れ方である。敵は誰ともわからぬが、相手はそんなに多数ではない。土方、沖田、藤堂の三人をめがけて切り込む太刀の烈しいこと、それをまた三人が飛鳥の如く、前に飛び後ろにすさつて突き立て斬り立てるめざましさ、ことに土方歳三は小兵こひょうであつて、その働き自在。

小栄は飛び起きて厠かわやの中へ逃げ込む。平間重助と糸里は最初、夜具の上から一刀ずつ刺されたけれども幸いに身に当らず、この室を逃げ出した。近藤勇は、それを見ただけで、見のがす。

「おお、汝おのれは土方だな」

重傷の中から、芹沢鴨は黒装束の一人を土方歳三と認める。大方その軽妙な身の働き、刀の使いぶりが、彼の眼に見て取れたからであろう。

「うむ、いかにも土方だ」

「卑怯な！ ひきようなぜ尋常に來ぬ、暗討ちとは卑怯な」

「黙れ黙れ、これが貴様の当然受くべき運命だ！」

勢い込んだ一太刀が、芹沢の右の肩。

「むー」

これは今までの傷のなかでいちばん深かった。芹沢はついに刀を持つに堪えなくなった。

「エイ！」

左から來た沖田総司の一刀は、横に額から鼻の上まで撫なでる。

「おう——」

芹沢は撞^{どう}と倒れた、土方歳三は直ぐにそれにのしかかる。

「残念！」

芹沢は土方に刃^{やいば}を咽喉^{のど}にあてがわれた時に叫ぶ。

「土方待て」

近藤勇は進んで来て、

「芹沢、拙^{おれ}者がわかるか、拙者は近藤じゃ、恨^{うら}むならこの近藤を恨め！」

「おのれ近藤勇！」

恨^{ひとこと}みの一言^{なご}を名残り、土方歳三はズプリと、芹沢の咽喉を刺し透^{とお}してしまった。

「これ、お梅」

藤堂平助は慄^{ふる}えていたお梅の襟^{えり}髪^{がみ}を取つて、

「よく見ておけ、これが見納めだ、貴様の可愛^{とのこ}しい殿御^{どのご}の最期^{さいご}」

のざまはこれだ」

「どうぞお免ゆるし下さい」

「しかし美しい女だな」

「芹沢が迷うだけのものはある」

藤堂と沖田とは面かおを見合せて、土方と近藤との方に眼を向ける。助けようか殺そうかとの懸念けねん。近藤勇は首を縦に振らなかつた。

沖田は女の弱腰よわごしを丁ちようと蹴ける。

「あれ——」

振りかぶった刀の下に、お梅は肩先から乳の下にかけてザツクと一太刀、虚空こくうを掴つかんで仰のけざると息は脆もろくも絶えた。

芹沢の屍骸しがいの上には、夜眼よめにも白くお梅の身からだが共に冷たくなつて折り重なっている。

近藤勇をはじめ四人は、そのままにしておいてこの場を引上げた。

滑稽こっけいなことはその翌日、壬生寺みぶでらで、昨夜殺された芹沢鴨の葬式があつたが、その施主せしゆが近藤勇であつたこと。勇は平気な面をして、自分が先に立つて焼香もすれば人の悼辞くやみも受ける。

会津侯へは、昨夜盗賊が入つて、そのために芹沢とんしよが殺されたと届けた。これも滑稽な話で、新撰組の屯所とんしよへ入る盗賊があると思うのも、あつたと届けるのも、共に虫のよい骨頂こつちようであるが、表面はそれで通つた。

新撰組の内証ないこうもこれで片がついて、芹沢の子分は二三人、姿をくらました者もあつた。勘定方の平間重助なども逃げてしまつたが、大体は大した変りなく、その全権は近藤勇の手に歸きして、

土方歳三はその副将となる。近藤勇が京の地を震わすのはこれから。

十六

夜明^{よあ}け鳥^{がらす}の声と暁の風とで、ふと気がついた机竜之助は、自分の身が、とある小川の流れに近く、篠藪^{ささやぶ}の中に横たわっていることを知った。それでも刀だけは手から離さず、着物は破れ裂けて、土足には突傷かすり傷。

「ああ」

起き返ろうとしたが節々^{ふしふし}が痛い、じっとしていれば昏々^{こんこん}として眠くなる、小川の縁^{ふち}へのたつて行つて水を一口飲んで、やつと気が定まる。

どうして、こんなところへ。ああ、あれからあれ、あれまでは確かであつた。あれから刀を抜いて……さてあの小女こおんなはどうした。間毎間毎を荒あばれ廻つて、そうして庭へ下りた、大勢に囲まれた、幾人か切つたに相違ない、血もついている、それから鉄砲という声が聞えたようだ、それを聞くと庭の大きな松の樹にかけ上つた、飛び下りたのは内か外か、それから闇を駈けて駈け廻つた——竜之助は今や正氣に復して、昨夜来のことを臍おぼろに辿たどつて行つてみると、さあ、芹沢との約束だ！

遅い、遅い、もう夜明けだ、芹沢との合図はまるで滅茶滅茶。

「やむを得ん、是非がない」

竜之助は呟つぶやいた。ともかくも夜の明けぬうちに何とかせねば

——幸い、ここは人目に遠いところではあるけれど、このなりではどこへも行けない。

向うから人が来るようだ。

この篠藪ささやぶの裏は堤どて、それを伝うて人の草履ぞうりの音が聞える。

竜之助は、その人を待っている。

その人は提灯を持っていたけれども、夜明け間近の空で灯ひは入れていなかった。

「もし」

竜之助は篠藪をかき分けて、のたり出ながら言葉をかける。

「はい」

通る人の声は慄ふるえる。

「突然ながら……」

「はい……はい」

立ち止まった人は股またをふるわす。

「道に迷うた者でござるが」

竜之助の姿を見た通りがかりの人はベタリ地面へ坐つてしま
い、

「はい、どうぞ命ばかりはお助けを願いまする」

からちようちん
空提灯を投げ出した。

「いや、拙者は悪者ではない」

「ど、どうぞ、お助け、せがれ倅が急病でお医者様へ参るのでござり

ます」

「これ、思い違いを致すな」

「持ち合せは、これだけ、これを差上げまする、命ばかりは、命
ばかりは」

しま
縞の財布を懐ろから出して、竜之助の前に置くや、後ろへいざ
るように退ると、土手から田圃へたんぼ転げ落ちる、転げ落ちると共
に田圃中をいちもくさん一目散に逃げ出した。

「思い違いをしたと見える、粗忽そそつかしい奴だ」

竜之助は苦笑いをして、そこに投げ出されてあつた財布に眼がとまる。彼は、やや躊躇ちゅうちよして、それを拾い上げる、銭の重味はザツクリとして手答えがある。

竜之助も今まで善いことばかりはしていない。しかし人の金銭ものの手をかけたのはこれが初めです。

河内かわちの方から脱ぬけて来た机竜之助、トボトボとして大和国八木しゅくの宿へ入ろうとして、疲れた足を休める。

大和は古蹟と名所の国。行手を見れば、多武とうの峰みね、初瀬山はつせやま。歴史にも、風流にも、思い出の多い山々が屏風のように囲んでいる。竜之助はいま突いて来た竹の杖を道端に立てて歩みを止めたが——彼の姿を見れば大分変っている。

川勝かわかつの寺の堤どてで、賊と見誤られて財布を投げ出して行かれた、心にもなくそれに手をかけてみると、人を嚇おどすことの容易たやすいのに呆あきれる。竜之助は、ついついそこに待ち構えて、も一人、通行の人を嚇して着物を剥はぎ取った、いま身に纏まとうている縞しまの袴あわせがそれです。

差しているのはただ一本の刀。

笠をかぶって、右の風体ふうていで大和路を歩いて行く。誰が見ても渡り者の長脇差、そのくらいにしか見えない。

かの財布の中の金は、ここへ来るまでに大方尽きた。

人の命を取ることと、人の財布を盗とることといずれが重い——人を斬ることをなんとも思わぬ竜之助が、人の金銭をとったことに苦悶くもんするは何故なぜであろう。わけのわからない話であるが、竜之助は、このことを苦にする。

大和国八木の宿。

東は桜井より初瀬にいたる街道、南は岡寺、高取、吉野等への道すじ、西は高田より竹の内、当麻たいまへの街道、北は田原本たわらもとより奈良郡山こおりやまへ、四方十字の要路で、町の真中に札の辻がある。

竜之助は西から来て、この札の辻の前へ立った——この札の辻かたわらの傍には大きな井戸があつて、四方あたりには宿屋が軒を並べている。さしも客を争う宿引やどひきも、なぜか竜之助の姿を見てはあまり呼び留めようとしなない、これはまだ日脚ひあしの高いせいばかりではあるまい。竜之助は仰いで高札こうさつを見る。

「檄げき」

此回このたび外夷御親征のため、不日南都へ行幸の上御軍議あるべきにつき、その節御召に応じて忠義を励むべき……」

これが出しで、本文は大分長い。竜之助は読み下してみる

と、それは御親征について忠勇の士を募集するという檄文げきぶんで、誰が出したともわからないが、ただ「天忠組」とのみ署名してあります。竜之助はそれを読むには読んだが腹がすいています。当時の志士の血を湧かした尊王とか攘夷とかいうことはあまり竜之助には響かない。この時は、また例の事を好む壮士どもが、悪戯いたずらをしたとぐらいに考えて、それよりは腹の減ったことが、著しくこたえてきます。

どこぞで飯を食おう。しかし懐中ふとこが甚だ淋しい——立派な飯屋へは入れない。何か食わねばならん。町を少し行くと饅頭屋。黒崎というところから出た名代なだいの女夫饅頭めおとまんじゅう、「黒崎といへども白き肌と肌、合せて味うまい女夫まんぢゅう」と狂歌が看板に書いて出している、この店へ入って行った竜之助。

蒸籠せいろうを下ろして、蒸したてのホヤホヤと煙の立つのを、餓え

た腹で見た竜之助は、飛びついて頬ばりたいほどに思う。ああ、さもない！ 自分ながら抑おさえていたのは束つかの間、黒い盆の上に山と盛って出された時、夢中でその盆を平げてまた一盆。渋茶の茶碗を下に置いて、

「亭主、いくらになる」

「へえ、有難うござります、百と五十いただきます」

百五十と言われて竜之助はハタと当惑する、懷ろへ手を入れてはみたが実は百二十文しかない。

「亭主、まことに相済さかまんが」

竜之助は財布を逆さかさにして、

「持ち合せが、これだけしかない、百二十文——」

「何でございますと」

饅頭屋の亭主は、少しく眼の色を変える。

竜之助が、もう少し如才じよさいなく詫わびをしたら、或いはそれで負けてもらえたかも知れぬ、またこの店の亭主が、もう少し情けを知った人ならば、それで我慢がまんしたかも知れぬ、しかしながら、竜之助は誰に向つてもするようにな、ない袖は振れぬ、ないものは払えぬというのが不貞ふてくされのようにも取れば取れるので、勘定高い亭主が承知しない。

「なんと言つても、ないものはないのだ」

竜之助は、ツンと言い切る。この場になつても竜之助には、これ以上のことは言えない。頭をたたいて哀求あいきゅうするなどということとは、どうしたつてできないのです。

「よろしゅうございます、左様ならば出る所へお出なさい」
亭主は襷たすきをはずして、どこへか行こうとする。

「待て、主人、どこへ行く」

竜之助は呼び止めると、

「このごろは諸国の浪人や無頼漢ならずものが入り込んで、商売人泣かせを働いて困るじゃ、見せしめのため、お代官へ行き申す」

「待つてくれ」

竜之助はこの時、腰に差していた刀を鞘のまま抜き取って、亭主の前に置き、

「では此刀これを取つてくれ」

「この刀を？」

「うむ、僅か三十文の銭のために縄目なわめの恥にかかるのはいやじゃ、この一腰ひとこしを抵当かたにとつてくれ」

「へえ、左様でございますか」

三十文の抵当に刀一本。たとえどんな鈍刀なまくらにしる引合わぬということはない。亭主の機嫌が少し直り、

「どうも、町人には不似合いなものでございますが、では、一時それをお預かり申しておきましよう」

竜之助は、その刀をそこに置いて、財布も小銭も置き放し、笠一つを持って、ふいとこの店を出てしまいます。

「いやどうも、このごろは悪い奴が近辺へ入り込むので。なに、わずか三十文のところを^{てきび}手厳しく言うでもないが、いくら^{まんじゅうや}饅頭屋だからというて、甘くばかり見せておられぬわい」

この店を出た机竜之助、田原本の街道を取って北へと歩いて行く。竜之助が最初の目的ならば、東をめざすが順であろうに。

十七

ところへ、田原本の方から早足に歩いてくる旅人。それは裏

宿の七兵衛であつたが、摺^すれちがつて竜之助の方で、それと氣のつかなかったのは無理もないが、七兵衛の方で竜之助に氣のつかなかったのは、竜之助が小荷駄^{こにだ}の馬の蔭に見えがくれであつたのと、一つには無腰^{むこし}であつたから、刀を差し歩^はく人のみをめざした七兵衛の眼を外^{はず}れたものと見えます。

八木の宿へ入^めつた七兵衛が、何心なく寄り込^めんだは偶然にもかの女夫餅^{めおともち}。

「御免よ」

「はい、おいでなさいまし」

七兵衛が腰をかけたのは、竜之助が置いて行^いつた刀の直ぐ近い所^いでした。

「ここに怖^{おっ}かないものがある」

七兵衛は饅頭を食^くいながら、さきほど竜之助が置いて行^いつた

刀を少し横の方に避けると、亭主は、

「お客様、その刀をお買いなすつて下さいませぬか」

「わしに買えと言わしやるか」

「へえ、たつた今、食い逃げの^{かた}抵当に取つた^{しろもの}代物でござります」

「なるほど」

七兵衛は、手をのばして刀をこつちへ引き寄せる。七兵衛もちよつとした刀の^{めきき}鑑定ぐらいはできる男であつたから、

「拝見してもよいかな」

「へえ、御遠慮なく」

「なるほど」

七兵衛はこの刀を抜いて、しばらく眺めていましたが、

「はてな」

首を捻^{ひね}つて、

「親方、目釘めくぎを外してもいいかね」

「どうか、よくお調べなすつて」

七兵衛は目釘を外して、柄つかを取払い、その切つてある銘めいを調べて見ると、

「武蔵太郎安国——待てよ、こいつはおかしいぞ」

七兵衛は思う、備前物や相州物の類たぐいであれば、この辺を通る人でも差して歩くに不思議はないが、あまり知られていない武蔵太郎あたりを、この辺で差して歩く人があつたとは思いがけない。

「親方、この刀を差していた人というのは、どんな風なりをした人だつたかね」

「左様でございます、破落戸ならずものか、賭博打ばくちうちのような人体にんていでもあり、口の利き方はお武家でございます、大方、浪人の食詰め者で

「ございましょう」

七兵衛は、さつきから思い当ることがあるから、刀を見つめながら主人に問う、

「年の頃は？」

「左様、三十四五」

「面つきは？」
かお

「月代さかやきが生えて、色が蒼白くて、眼が長く切れて」

「それだ！」

七兵衛は、その人を尋ねんとしてこれまで来たのです。

「その人はどっちへ行つた」

「さあ、ちとばかり前、あちらの方へ、田原本の方へ行きました」

「田原本へ——」

七兵衛は忙しくせわ懷中へ手を入れて、

「親方、いくらになる」

「お客様、その刀もお買い下さいますか」

「買おう、売ってもらいましょう」

「饅頭の方が八十文いただきます、刀はちとね価が張ります」

「いくらで売る」

「はい、五両、ちとお高うございますが、仕込みが安くござい
ませんから、へえ」

七兵衛は、黙って五両と一分をそこへほう抛り出して、その刀を
かか抱えてこの店を飛び出しました。

はせでら長谷寺の一の鳥居。机竜之助はそこへ立ち止まって、
「これこれ、巡礼衆」

「はい、私どもに御用でございますか」

「ちと、物をたずねたいが、あの長谷の観音の籠堂こもりどうと申すのは、誰が行つても差支えないか」

「ええええ、差支えのある段ではございませぬ、人の世で見放されたものを、お拾いなさるのが観音様の御利益ごりやくでござります」

「左様か、忝かたじけない」

僻ひがんで取れば、この巡礼の返答しやくぶりも癩いにさわる。おれの今日こんにち

の運命は自ら求めたもので、おれは落魄おちぶれても氣儘きままの道を歩い

ているのだ、まだ神仏におすがり申して後生願ごしよううような心は起

さぬ。竜之助の心には、充分の我慢が根を張つてゐるけれども、

差向き今の身に宿を貸してくれるところは、神社仏閣の廂ひさしの下

のほかにはありそうもない。それで、いま通りかかる巡礼に長

谷の観音の籠堂を聞いてみたのであります。

夕暮の色は、奥の院から下りて来る。黒崎、出雲村いずもの方は夕煙が霞のようになって、宿に迷う初瀬詣りの笠が、水の中の海月くらげのように浮動する。聞かでただあらましものを今日の日も、初瀬の寺の入相いりあいの鐘は、今し九十九間の階廊かいろうを下りて、竜之助の身にも哀れを囁くささや。

わが子を縁から蹴落けおとし出家入道を遂とげた西行法師が、旧愛の妻にめぐり会ったという長谷寺の籠堂こもりどう。竜之助はともかくもここで夜を明かそうとして、その南の柱の下に来ました。

後註

二 ここで罫囲み終わり

三 「落着きが」は底本では「落書きが」

底本：「大菩薩峠 1」ちくま文庫、筑摩書房

1994（平成 6）年 12 月 4 日第 1 刷発行

1996（平成 8）年 3 月 10 日第 5 刷

底本の親本：「大菩薩峠」筑摩書房

1976（昭和 51）年 6 月初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：(株) モモ

校正：原田頌子

2001 年 5 月 10 日公開

2010 年 11 月 2 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。